

一般国道 9 号米子道路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 X

鳥取県米子市

いん だ い せき ぐん
陰 田 遺 跡 群
(本 文 編 II)

いん だ い せき つつみ の しも ちく
陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区

いん だ い せき
陰 田 ヒ チ リ ザ コ 遺 跡
いん だ こ いん だ い せき
陰 田 小 犬 田 遺 跡
いん だ か じ だん い せき
陰 田 荒 神 谷 遺 跡

1996

財団法人
建設省

鳥取県教育文化財団
倉吉工事事務所

凡 例

1. 本報告書における方位はすべて真北を示し、レベルは海拔高である。X =、Y = の数値は、国土座標第V系の座標値である。

2. 本報告書において採用した遺構の略号は、次のとおりである。

S I : 壁穴住居跡 S S : テラス状遺構 S B : 挖立柱建物跡 S D : 溝状遺構

S K : 土坑、土壤墓 S C : 道状遺構 S E : 井戸 P : 柱穴

3. 遺物実測図のうち、須恵器は断面黒塗り、瓦質土器は断面網掛け、それ以外のものは断面白抜きで表した。
また木製品の断面の年輪は、模式的な表示である。

4. 本文中、挿図中および写真図版中の遺物番号は一致する。

5. 遺物番号は、本報告書中を通じて通し番号である。

本 文 編 II 目 次

第5章 隕田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区の調査	1
第1節 位置と環境	(北浦)	1
第2節 調査の経過と方法	(北浦)	1
第3節 遺構と遺物	1
1 概要	(北浦)	1
2 テラス状遺構	(北浦)	2
3 挖立柱建物跡	(北浦)	13
4 溝状遺構	(北浦)	15
5 土坑	(北浦)	15
6 土壙墓	(北浦)	15
7 遺構に伴わない遺物	(北浦)	16
第6章 隕田ヒチリザコ遺跡の調査	20
第1節 位置と環境	(北浦)	20
第2節 調査の経過と方法	(北浦)	20
第3節 遺構と遺物	20
1 概要	(北浦)	20
2 テラス状遺構	(北浦)	23
3 土坑	(北浦)	48
4 遺構に伴わない遺物	(北浦)	50
第7章 隕田小犬田遺跡の調査	59
第1節 位置と環境	(熊谷)	59
第2節 調査の経過と方法	59
1 自然科学的手法による調査	(熊谷)	59
2 隕田小犬田遺跡におけるプランツ・オバール分析 (古環境研究所)	59
3 隕田小犬田遺跡における植物珪酸体分析 (古環境研究所)	66
4 調査の経過と方法 (熊谷)	71
第3節 遺構と遺物	73
1 概要 (熊谷)	73
2 土坑 (熊谷)	74

3 河川跡	(熊谷)	75
4 水田跡	(熊谷)	77
5 遺物の出土状況	(熊谷)	84
6 出土遺物	(北浦)	91
第4節 陰田小犬田遺跡の古環境について	(熊谷)	123
第5節 陰田小犬田遺跡出土土器付着漆の分析について	国立歴史民俗博物館 永鷲正春	125
第8章 陰田荒神谷遺跡の調査	127
第1節 位置と環境	(山川)	127
第2節 調査の経過と方法	(山川)	127
第3節 遺構と遺物	137
1 紹要	(山川)	137
2 古墳時代後期～奈良時代のテラス状遺構	(山川)	137
3 中世以降のテラス状遺構	(山川)	164
4 土坑	(山川)	164
5 土器溜り	(山川)	169
6 ピット群	(山川)	170
7 井戸	(熊谷)	171
8 遺構に伴わない遺物	(北浦)	172
第9章 考察	191
第1節 陰田遺跡群出土須恵器の蛍光X線分析	奈良教育大学 三辻利一	191
I 陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区、陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区、陰田ヒチリザコ遺跡、陰田小犬田遺跡、陰田第6遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	191
II 陰田荒神谷遺跡出土須恵器の蛍光X線分析	196
第2節 陰田遺跡群における鉄器生産の様相	(山川)	200
第3節 陰田遺跡群出土鉄滓の金属学的研究	和歌博物館	203
I 陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区及び陰田ヒチリザコ遺跡出土鉄滓の調査	203
II 陰田小犬田遺跡出土鉄滓の調査	206
III 陰田荒神谷遺跡出土鉄滓の調査	210
第4節 陰田遺跡群の性格	(北浦)	220
おわりに	224
抄録	225

第5章 陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区の調査

第1節 位置と環境 (第4、226、227図)

遺跡は、米子市陰田町字久幸山に所在し、マノカンヤマ（標高72.8m）丘陵の北西山麓部に位置する。全体に緩やかにくぼんだ傾斜地であり、所々に段状の地形が形成されている。現況の地図は雑木による山林であるが、かつては果樹園であったらしく、2本の排水溝が切られている。調査区の大半は大幅に擾乱されており、現地形は原況から大きく改変されていた。遺跡の西側は農道によって削られており、丘陵裾部の地形は原況をとどめていない。特にSS-1の北側、SS-3の北側には、それぞれ土取り跡と思われる大きな抉りが生じていた。調査地の眼前には、南北に小犬田の谷が伸び、水田が營まれている。

北方の谷口部には、縄文時代前期末から中期の散布地である陰田第7遺跡（註1）が存在し、谷を挟んだ南西方には荒神谷山（標高83m）がそびえ、その山麓部には古墳時代後期から奈良時代にかけてのテラス状遺構を検出した陰田荒神谷遺跡（本書本文編II、第8章）が所在する。また当遺跡の南方約30m、マノカンヤマの南西山麓部に陰田ヒチリザコ遺跡（本書本文編II、第6章）が所在し、ここでも古墳時代後期から奈良時代にかけてのテラス状遺構が検出されている。遺跡眼前の水田部には陰田小犬田遺跡（本書本文編II、第7章）が確認されており、周辺遺跡からの流入と思われる遺物の包含層が形成されている。陰田マノカンヤマ遺跡久幸池地区（本書本文編I、第4章）のSI-1（第198、200図）は、マノカンヤマの支丘陵墓山（標高33.3m）の尾根を越えした位置にあり、その間約90mの距離を測る。調査区内の標高は、現況で10～25m、検出面で9～25mである。

第2節 調査の経過と方法 (第226、227図)

調査は、平成5年4月より準備作業に着手、以後11月まで現場作業を実施した。調査地内は、事前に米子市教育委員会によって試掘調査が行われており、遺構、遺物の検出状況と現地形の様子から判断して、調査範囲を決定した。調査面積は1,731m²であった。調査前の地形を測量後、現地形を勘案してベルトを設定し、土層状況を観察しながら重機により表土を除去した。当調査地においては、現況で7ヶ所の段状の地形が確認でき、テラス状の遺構を意識しながらの調査となった。陰田ヒチリザコ遺跡での作業終了後、調査に着手。ベルトの土層断面を観察しながら掘り下げを行い、必要に応じて、遺物の出土状況の写真撮影、実測、取り上げを行った。実測は、10m画グリッドをなす測量用基準杭を南北軸にあわせて設定し、これを利用した。遺構の検出にあたっては、岩脈の卓越したSB-2付近では、岩盤およびそれに連なる面を検出し、土質、土色の変化する落ち込みを追求した。そのほかについては、橙褐色土をベースとして、土質の変化を追求した。検出された遺構については、それぞれ写真撮影、実測を行い、調査区全体については、調査後の地形を平板測量し、ラジコン・ヘリコプターによる全体空中写真撮影を行った。

第3節 遺構と遺物

1 概要 (第227図)

遺構は、テラス状遺構を調査地の西側、斜面裾部寄りで2基（SS-1、3）、調査地斜面中腹部で1基（SS-2）検出した。SS-1は、柱穴状のピットと土坑状のピットを伴うもので、擾乱により北側が遺存していない。SS-2は、平坦面でピット群と建物跡？1棟（SB-2）、土坑1基（SK-1）、溝状遺構1条（SD-1）を検出している。SS-3は、SK-3、4を伴い、北方に向かって道状の平坦面が続く。SS-1と

S S - 2 の間の斜面部では、建物跡 1 棟 (S B - 1) と土坑 1 基 (S K - 2)、ピット群を検出した。S S - 2 の後背の崖面より上方の、調査地東側においては、遺構を確認していない。ただし、須恵器や磁石、石斧の出土がみられ、一見上方からの転落遺物のような出土状況であった。S S - 2 においても上方からの流入と思われる遺物の出土がみられること、また S S - 2 の後背崖面上方の堆積状況 (第231図) に不自然さが認められることがから、後世に地形の変化が加えられ、遺構が消失した可能性がある。

遺構の時期は、S S - 1、2 が古墳時代後期から奈良時代、S D - 1 が近世初頭に比定され、他の遺構については不明である。

2 テラス状遺構 (S S - 1~3)

• S S - 1 (第228、229図・写真図版47、84)

調査地の西側下方に位置する。調査前は上部層が擾乱された状態であり、遺構の存在を推測できなかった。北側が入り江状に大きく掘削されて遺構を破壊しており、全体像を把握できない。検出面では、標高 9~11m、北高 4.5~6.5m の間に位置し、丘陵裾部に近い傾斜面上に設けられている。

擾乱土の被覆を除去すると、炭化物と焼土を密に含む茶灰褐色土の広がりが確認できた。多量の鉄滓を土中に含み、若干の土器片、須恵器片が混入していた。結果的にこの層は、遺構埋土上面の約 5 分の 3 の範囲を覆っていた。

遺構は、傾斜面を断面 L 字状に掘削し、段差をもって平坦面を設ける構造である。平坦面のほぼ中央に 1 基 (P 1)、柱穴状のピットを配している。西側縁辺沿いに掘り込み (P 2) がみられるが、この遺構に伴うものであるか否かは、埋土の土層断面に擾乱があり、判然としない。段差部の北側の一部がサブトレニンによって不明瞭になってしまったが、段差部に溝が設けられた痕跡は見受けられなかった。遺構の平坦面は、平面形が不整形で、南北の遺存長 5.15m、東西の遺存幅 2.45m を測る。段差の最大比高差は 35cm となる。P 1 は、長軸 40cm、短軸 25cm の楕円形状を呈する 2 段掘りのピットである。柱根部の掘り方は、径 12cm 前後である。P 2 は、長梢円形状を呈する土坑状のピットである。北側が擾乱されており、原形は不明である。底面形はいびつで、南東側に 2 ヶ所三日月状の段を検出した。断面形は部分により異なり、逆台形状であったり、皿状であったりする。遺存長は 2.15m、遺存幅は 0.95m で、深さは最深部で 40cm を測る。ピット中からの遺物の出土はみられなかった。なお、本来遺構が北側にどの程度広がっていたのかは、判断し難い。

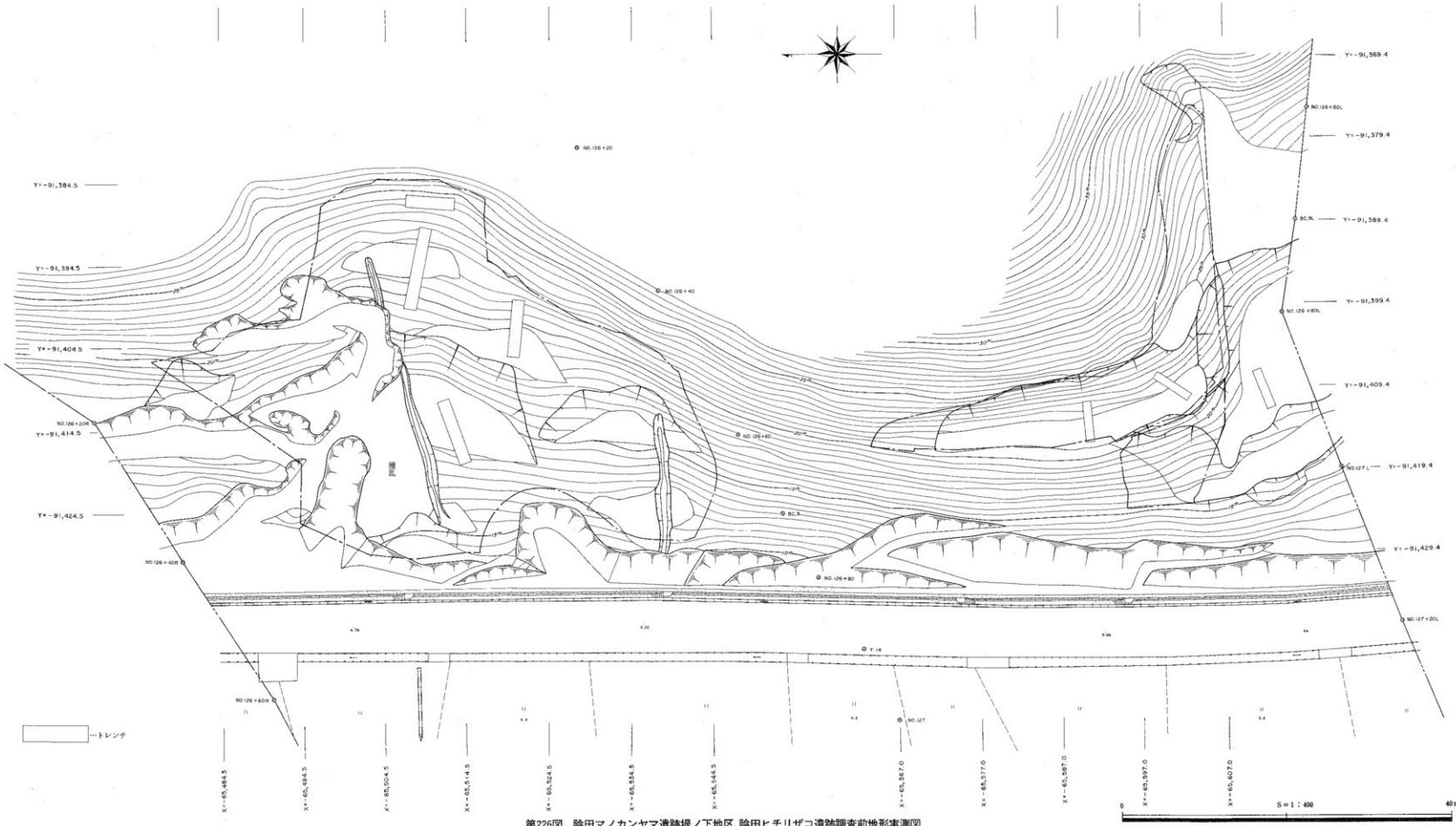
遺物は、すべて床面から浮いた状態で出土している。遺物の大半は多量の鉄滓で、出土総重量は 4,600g にのぼった。710、711 の鉄滓は椀形鍛冶滓で、710 は含まれた鉄が錆化したものである (註 2)。707~709 は轆の羽口で、709 は床面に比較的近いレベルで出土した。706 は断面角形の鉄製品で、鍛冶道具の盤と考える。土器は、図化できるものが少なく、703 は須恵器の蓋、704 は須恵器の腕あるいは鉢で、705 は円面鏡である。

遺構の埋土には、鉄滓、炭化物、焼土が混入しており、1 層において特に顕著であった。埋土は、廐滓場を示唆するような堆積状況である。出土した鉄滓のうち 2 点 (写真図版 95・資料 NO. 2、3) を、金属学的に分析しているが、1 点が精鍛鍛冶滓で、1 点は製鍛滓であることが推定されている (註 3・本書本文編 II, P 218)。鉄滓が生じた時期は、当遺構が営まれていた時期に重なるものと判断される。遺構の時期を判断するには土器資料に乏しいが、埋土中に須恵器、土器以外の夾雜物を含まないことから、ひとまず 7 世紀以降としておきたい。

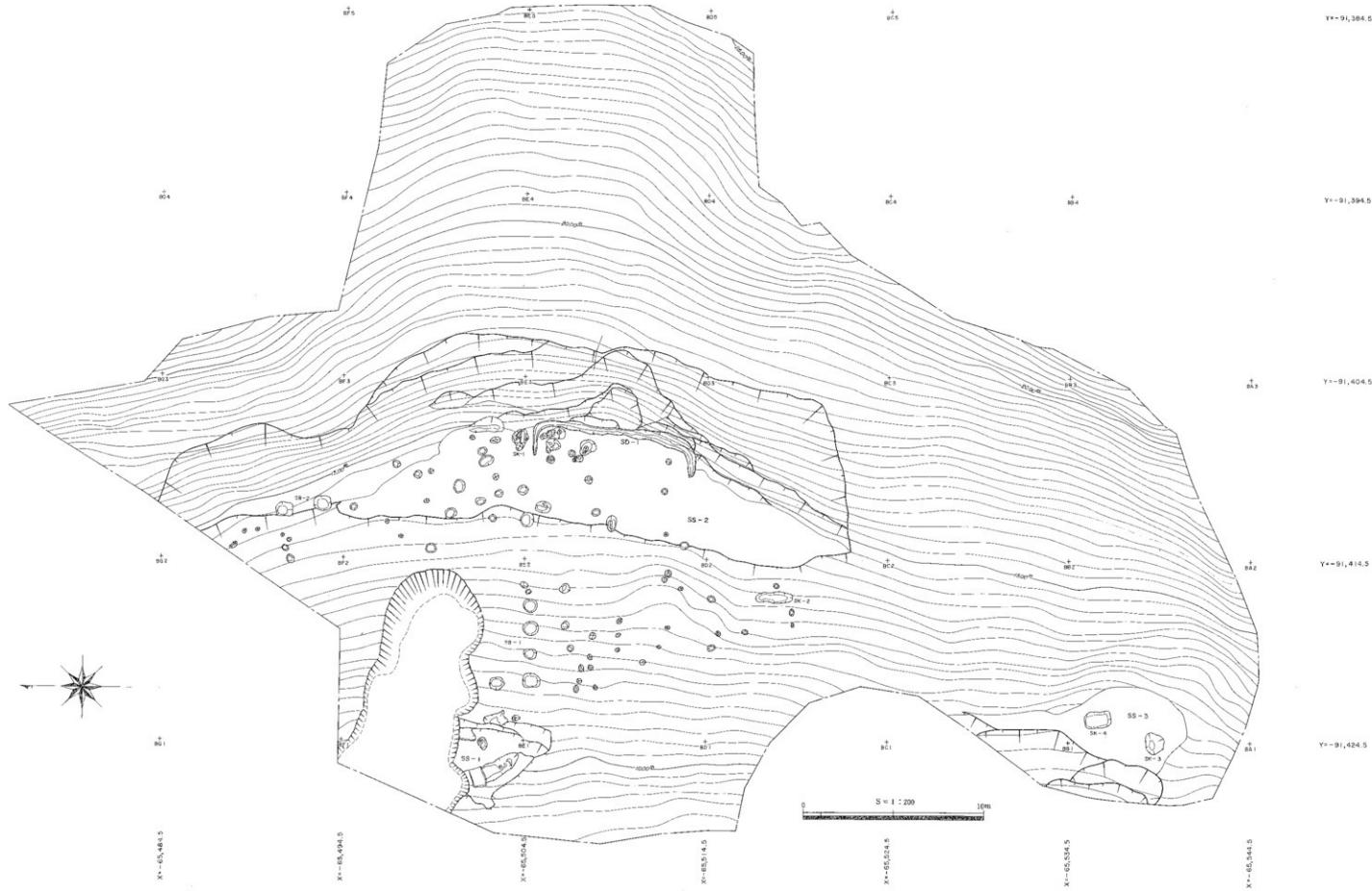
• S S - 2 (第230~232図・写真図版46、85)

調査地の中腹、標高約 15m 近りに位置する。調査前の状況でも、北半部が擾乱されていたものの、比較的大規模な段状地形が確認できた。

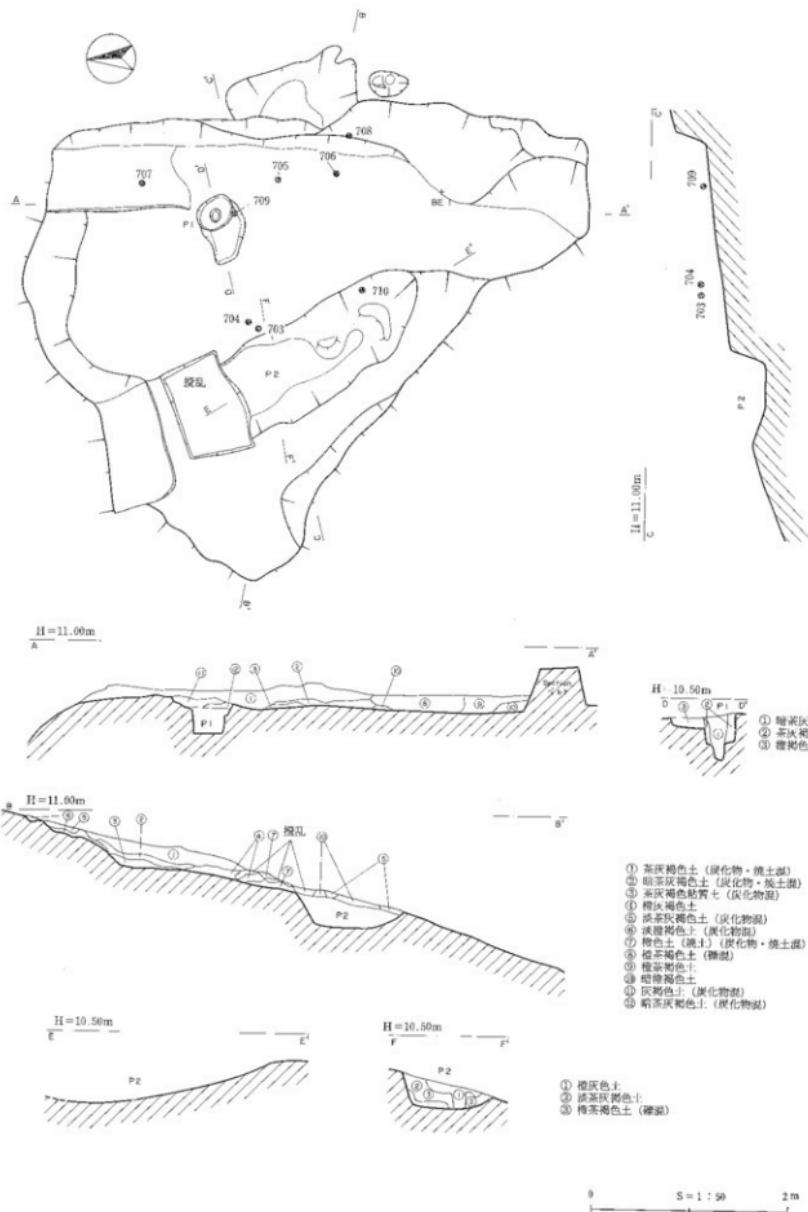
遺構は、傾斜面を鈍角な L 字状に断面を掘削し、平坦面を設ける構造である。遺構の平面形は半月形状で、平坦面は三日月形状を呈する。平坦面では柱穴状のピット群を検出したが、建物を推定できるような規則的な並びは、把握できなかった。平坦面のほぼ中央部崖面沿いには、溝状遺構 S D - 1 があり、その北側に土坑 S K - 1 が隣接している。後背の崖面は凹面をなし、平坦面の三方を囲む恰好になる。よって南北方向の断面形は、逆台



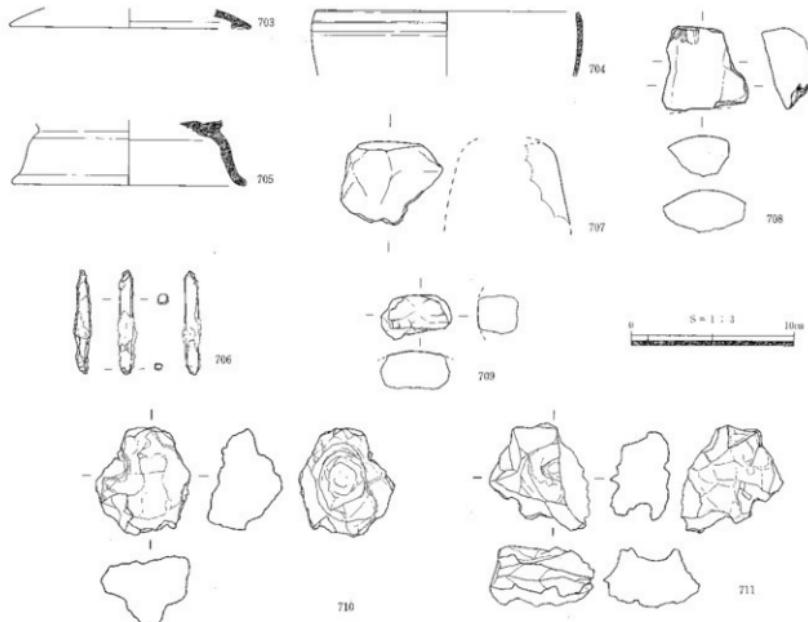
第226図 陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区、陰田ヒチリザコ遺跡調査前地形実測図



第227図 全体遺構測図



第228図 SS-1実測図



第229図 SS-1出土遺物実測図

形状になる。平坦面の南北の遺存長は約28m、東西の遺存幅約5m、後背崖面の最大比高差は約3mを測る。

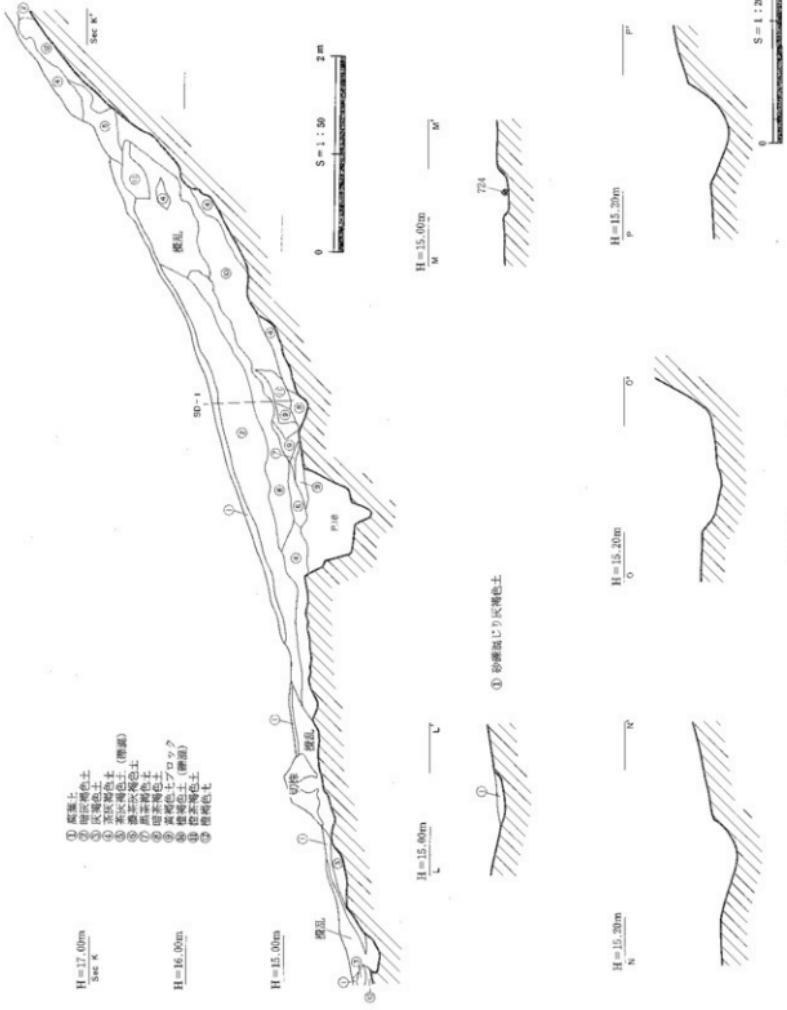
土層断面図（第231図）によれば、P18を穿つ造構面上に4層の茶灰褐色土が堆積し、その中にSD-1が設けられた様相を示す。SD-1の上層の堆積状況に乱れが生じているのは、当初の掘削崖面に10層の礫混じりの礫褐色土が堆積し、これを崖部でカットしてSD-1を掘り込んだため、11層付近が後背崖面の崖部となったためと考える。つまりSD-1は10層堆積後の所作といえる。後背崖面の上部の堆積状況の乱れは、当造構上方での擾乱に起因する土砂の排出を示すものと考える。SD-1、SK-1については、それぞれの項で詳述する。

遺物は、2層中から陶器（第242図741）が出土しており、この層以下での陶磁器類の出土はない。平坦面直上からは712、714の須恵器が出土している、平坦面直上層の4層からは、須恵器片（719）、土師器片、鉄滓、鞆の羽口が出土している。その他に掲載した遺物は、ピット中からの出土である。712は小ぶりの壺蓋で、陰田編年（註4）の7式に相当し、7世紀の中葉に位置づけられる。他の須恵器に比して年代が格段に古く、平坦面直上遺物とはいえ、流れ込みの遺物と考える。713、714は回転糸切りが観察できる壺の底部で、おそらく716と同じ形態をとると思われる。715、718は高台を有する壺で、718には糸切り痕が観察できる。717は小型の壺と思われる。719～721は壺の胸部分、722、723は鞆の羽口である。713～718の壺は、陰田編年の10式に相当し、8世紀後半に位置づけられている。鉄滓の出土総重量は1,100gにのぼり、うち1点（写真図版95・資料NO.1）を、金属学的に分析したところ、精鍛鍛冶滓であることが推定された（註5・本書本文編II、P218）。

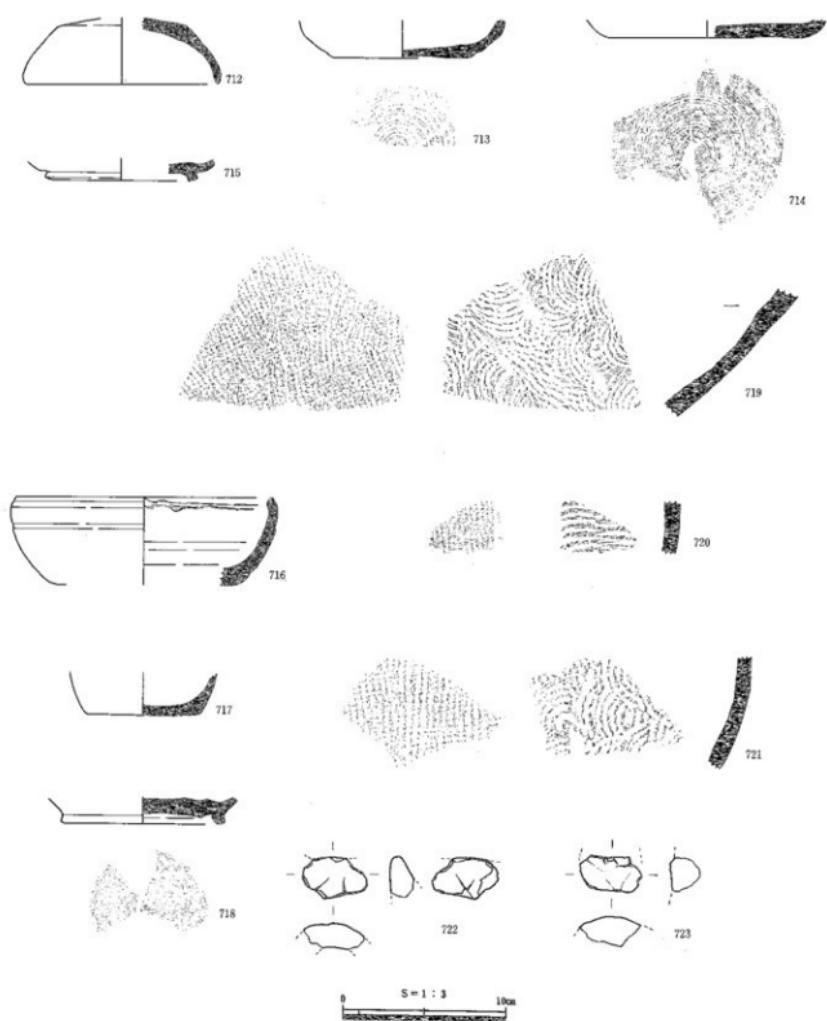
SS-2は、8世紀後半に造成されて雑舎的な建物が構築され、廃絶後近世初頭に段状の地形が再利用されたものと思われるが、鍛冶炉の検出には至らず、鉄滓、鞆の羽口が、本来的にSS-2に帰属するという確証は得



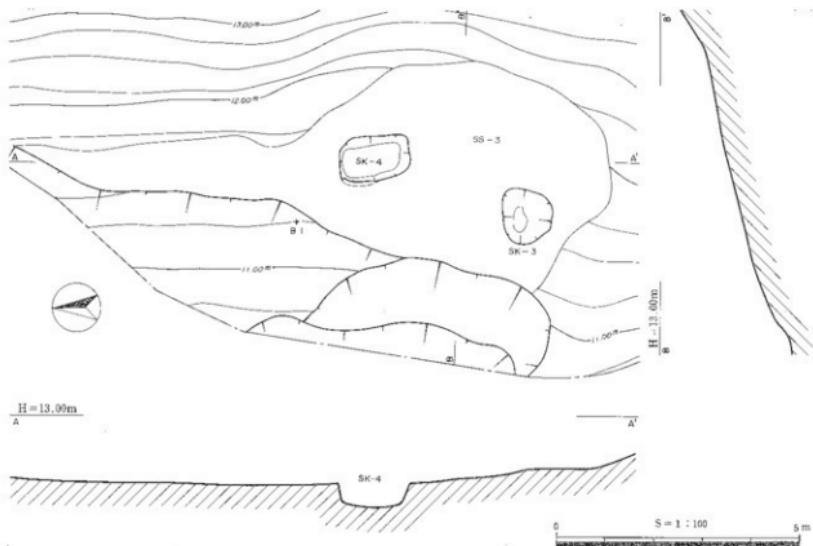
第230図 SS-2 実測図



第231図 SS-2断面実測図



第232図 SS-2 出土遺物実測図



第233図 SS-3 実測図

られなかった。

・SS-3 (第233図・写真図版48)

調査地の南西隅、斜面裾部寄り、標高約11.5m辺りに位置する。調査前の状況でも、段状地形が確認できた。

遺構は、傾斜面を掘削して平坦面を設ける構造であるが、後背部に段差を生じておらず、上方に向かって斜面が続いている。遺構の平面形は不整な半月形状で、北に向かって平坦面が道状に伸びている。道状部分から平坦部分に至ると土壙基SK-4があり、その奥側西南部分に土坑SK-3が位置する。南北の遺存全長は約12m、東西の遺存幅約4mで、道状部分は長さ約6m、幅約1mを測る。土壙基SK-4に伴う造成地と考える。平坦面からの遺物の出土は無かった。SK-3、4については、それぞれの項で詳述する。

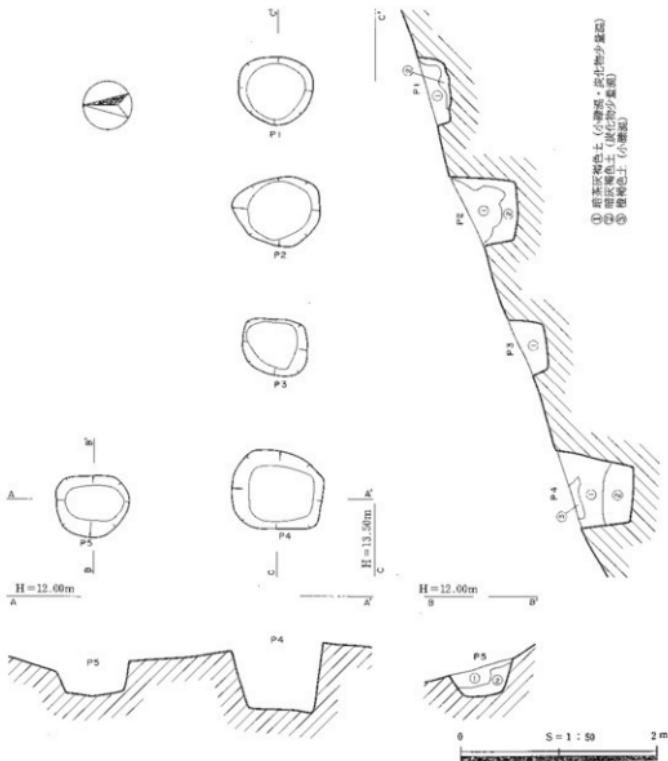
3 掘立柱建物跡 (SB-1、2)

・SB-1 (第234図)

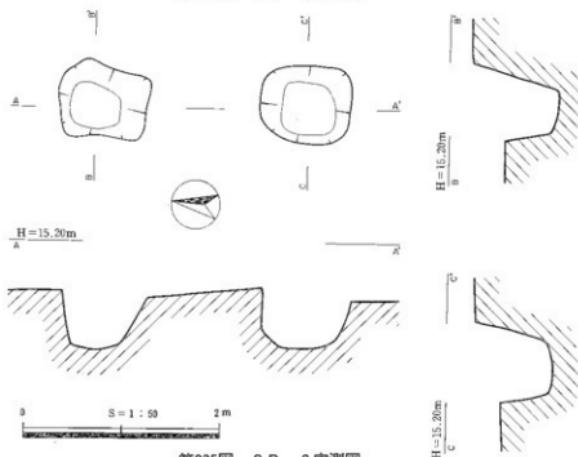
SS-1とSS-2との間の斜面部上に立地する。標高11.5~13mを測る。P1からP5までの5基のピットが鍵形に並んでいる。P1~3に対応するピットは確認できなかった。P4、5の延長線上、北側の擾乱部で、ピットが消失している可能性もある。ピットの径は50~80cm、深さは25~70cmを調り、P1~P4の柱間は50~70cm、P4とP5の柱間は1mである。ピット列の長軸が斜面の傾きに平行しており、またピットの検出面のレベルは、P1とP4では1.5mの比高差があり、底面では、1.9mの差がある。通常の掘立柱建物としては、甚だ建てにくい構造になる。覆屋が傾く構造をとる雑居の建物か。遺物は出土していない。

・SB-2 (第235図・写真図版46)

SS-2の北側の岩盤が卓越した付近に穿たれた、2基のピットである。標高14.5m付近に位置する。ピットの平面形は隅丸方形で、95×80cm、深さ85cmを測る。柱間は1.15mである。遺物は出土していない。



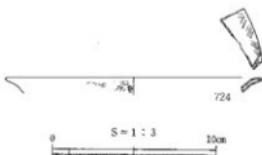
第234図 SB-1 実測図



第235図 SB-2 実測図

4 溝状遺構 (SD-1) (第230、231、236図・写真図版46)

SD-1は、SS-2のほぼ中央、後背崖面裾部に位置する。標高約15m付近にあたる。かすがい状の平面形で、断面形は浅い皿状または椀状を呈する。SS-2の項で述べたとおり、SS-2廃絶後に段上の地形を再利用したものと思われ、堆積土に掘り込まれたため、溝の上部はかなり流出しているものとみられる。検証できなかったが、SD-1にピットが伴う可能性がある。南北長約9m、鍵状に曲がった部分の長さ1.8mで、深さは5~15cmを測る。北側で西に折れ曲がった部分の底面から724が出土した。明朝の染付磁器の皿で、16世紀後半に比定される。



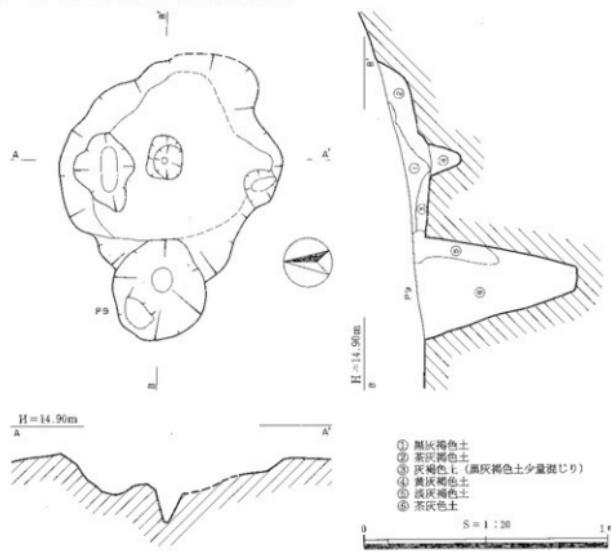
第236図 SD-1 出土遺物実測図

5 土坑 (SK-1~3) (第237~239図・写真図版47、48)

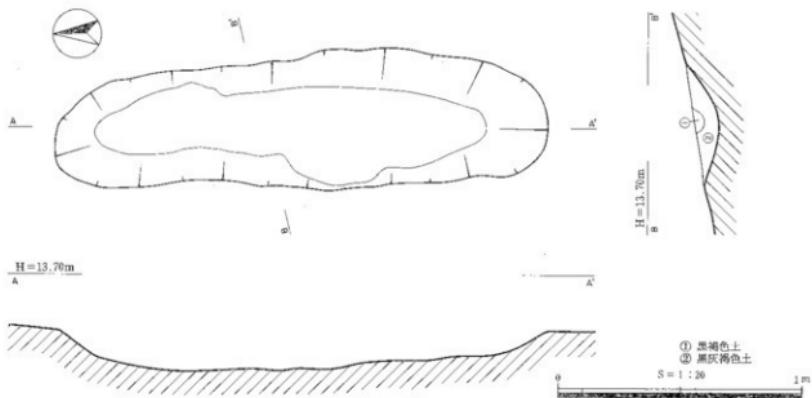
土坑は、3基検出した。SK-1 (第237図・写真図版47) は、SD-1の北側、SS-2の後背崖面裾部に位置し、標高は15.5mを測る。P9に切られている。平面は不整な円形を呈し、検出面で径約90cm、深さ約25cmを測る。遺物は、埋土上面から721が出土しているが、これはSS-2に伴うものと考える。SK-2 (第238図・写真図版47) は、SS-2の南西縁辺部、傾斜変換線の下方約1.5m付近に位置する。標高は13.75mを測る。長軸2m、幅55cm、深さ20cmの長楕円形を呈し、断面形は皿状である。遺物は、出土しなかった。SK-3 (第239図・写真図版48) は、SS-3の南西部に位置する。標高は11.5mを測る。有機分を多量に含んだ黒褐色系の土を埋土とする。平面は不整な円形を呈し、検出面で径約1m、深さ約30cmを測る。断面形は凹レンズ状である。遺物は、出土しなかった。SK-4の埋土に類似しており、土壤墓との関連が考えられる。焼却場的な印象である。

6 土壙墓 (SK-4) (第240、241図・写真図版48、85)

SK-3の道状部分を南に進んだ平坦部の入り口付近に位置する。標高11.5mを測る。有機分を多量に含んだ黒褐色系の土を上層の埋土とし、下層は橙茶褐色土を埋土とする。堆積状況は順層を示さない。平面は隅丸長方形を呈し、検出面で長軸1.45m、短軸95cm、深さ約50cmを測る。土壤墓のほぼ中央部で、底面から浮いた状態で鉄刀(725)が出土した。副葬品とみられ、守り刀として遺体の上に置かれたものと推測する。SK-3は墓地として造成されたもので、道状部分は参道と考える。



第237図 SK-1 実測図

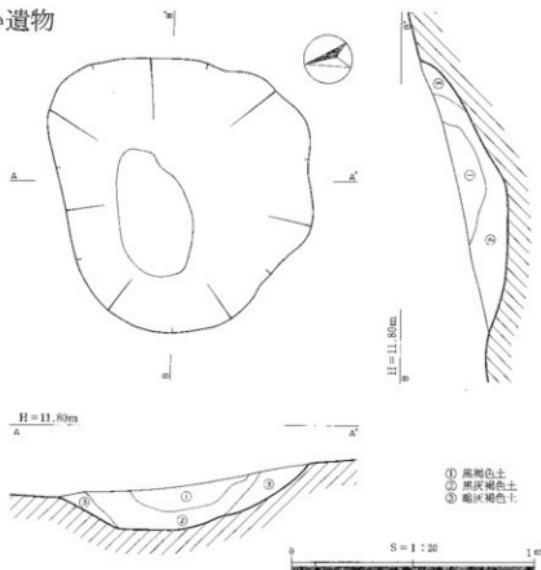


第238図 SK-2 実測図

7 遺構に伴わない遺物

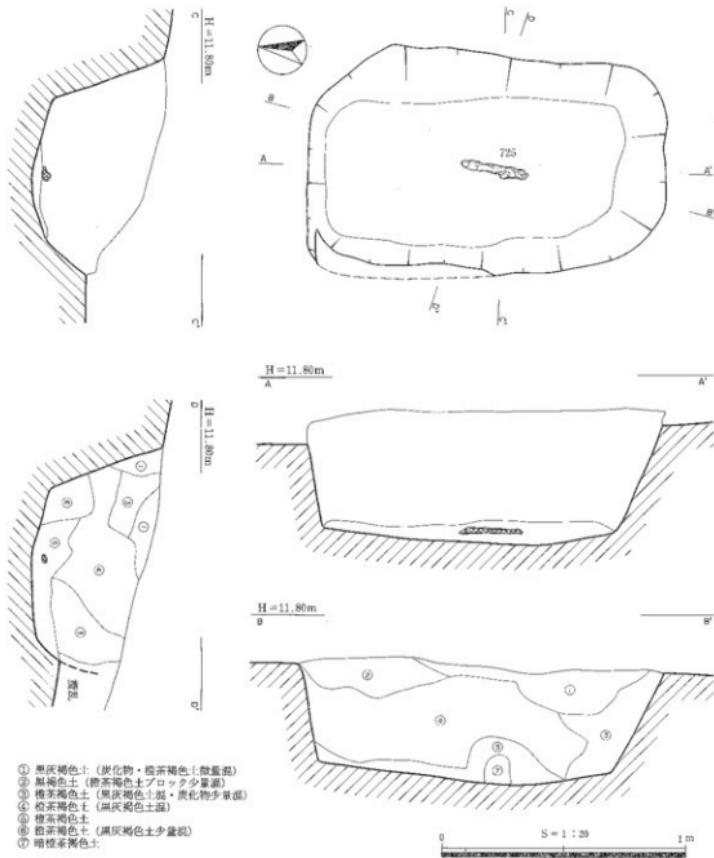
(第242、243図)

726～735は須恵器である。726は透かしのはいる脚部を持つ高壺で、陰田編年の5式、6世紀末～7世紀初頭に比定される。726～729は蓋である。727、728はわずかにかえりを持つが、729にはみられない。727、728は陰田編年の8式、7世紀後葉に比定され、729はそれに続く時期であろう。730、735は壺で、底部に回転糸切り痕が観察される。陰田編年の10式、8世紀後半に比定される。731は蓋の底部で、回転糸切り痕が観察される。732～734は甕である。736は土師器の皿、737は土師器の甕である。738は竈の焚き口部である。739は備前焼の壺で、間壁編年のVA期、16世紀前半～後半に比定されよう。740、

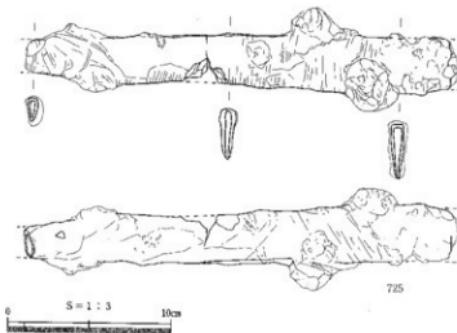


第239図 SK-3 実測図

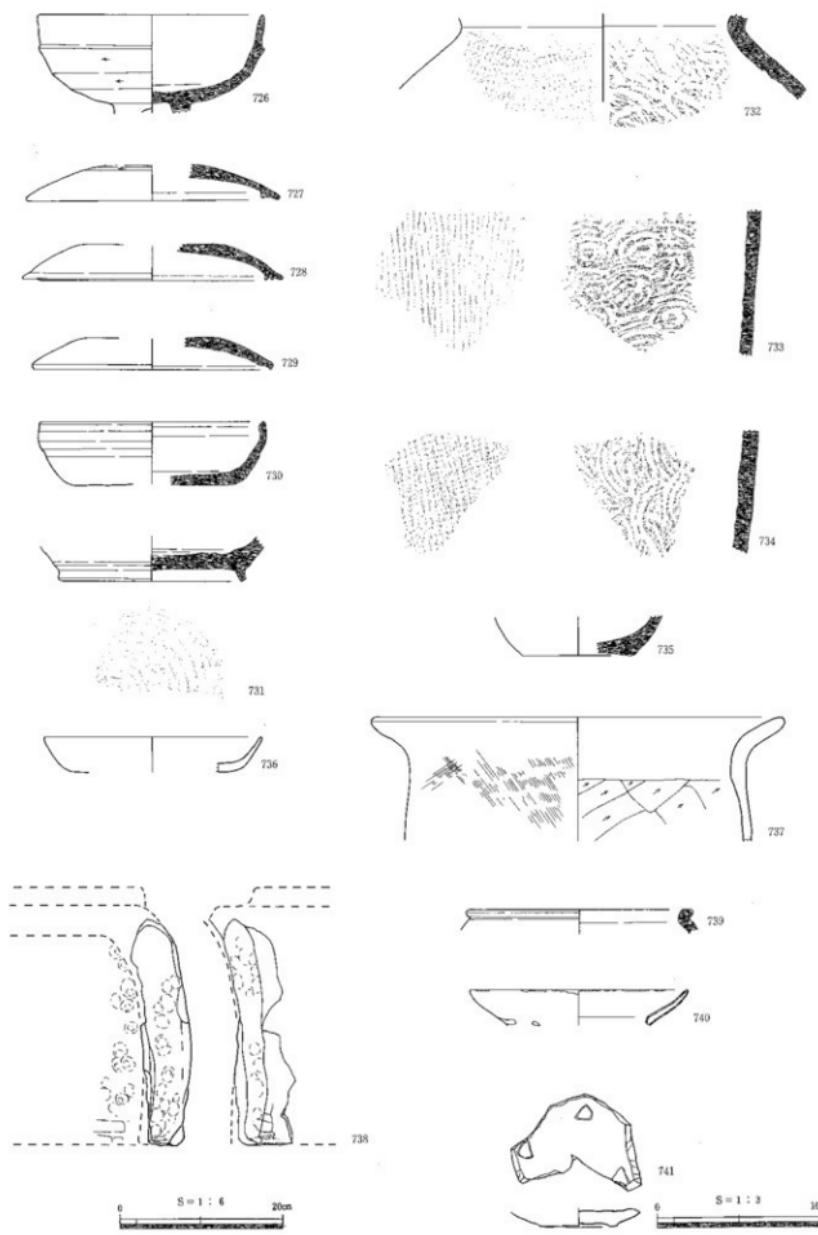
741は唐津焼の皿で、I期に比定される。742は半花崗岩製の砥石で、細長く面取りされた砥面が8面観察される。743は石英斑岩製の石斧である。744は黒曜石製の石鏃である。(註6)



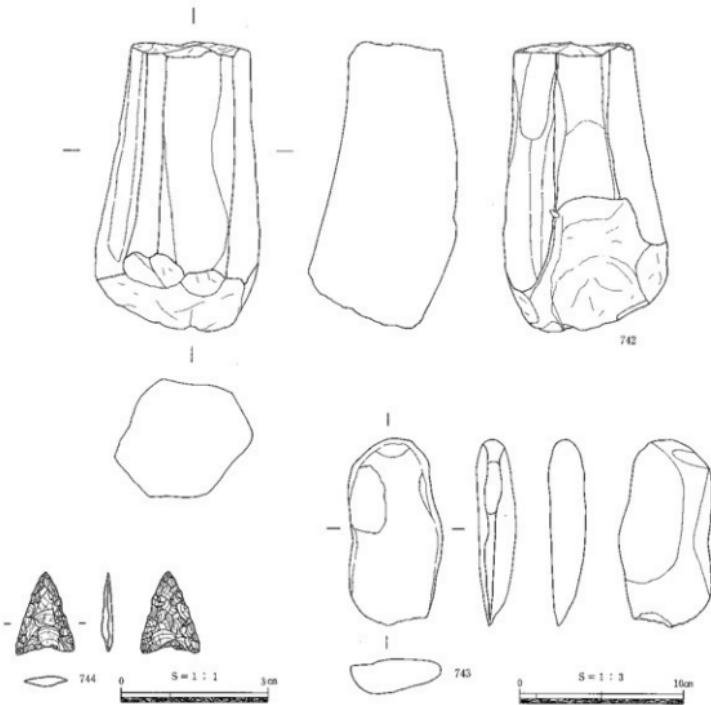
第240図 SK-4 実測図



第241図 SK-4 出土遺物実測図



第242図 遺構外出土遺物実測図(1)



第243図 遺構外出土遺物実測図(2)

註1 「陰田」 米子市教育委員会 1984年

註2 鉄滓については、房總風土記の丘穴澤義功先生にご教示いただいた。

註3 和銅博物館 「陰田遺跡群出土鉄滓の金属学的研究」(本書第9章第4節)

註4 萩本勝・佐古和枝 「第4節：須恵器について」 「陰田」 米子市教育委員会 1984年

註5 前掲註3

註6 当調査地出土の石製品については、鳥取大学医学部井上貴央先生にご教示いただいた。

第6章 陰田ヒチリザコ遺跡の調査

第1節 位置と環境 (第4、226、244図)

遺跡は、米子市陰田町字久幸山に所在し、マノカンヤマ（標高72.8m）丘陵の南西山麓部に位置する。小犬田池から東に向かって入り込む谷（字名ヒチリザコ）の入り口部にあたる。傾斜面に段状の地形が形成されており、谷奥部に向かって続くようである。現況の地目は雑木、竹による山林であるが、調査地南の隣接地では、果樹園が営まれている。遺跡の西側は農道によって削られており、丘陵裾部の地形は原況をとどめていない。調査区内の標高は、現況で15.25～29.75m、検出面で15～29mである。

遺跡の西側正面の丘陵裾部には、古墳時代後期から奈良時代にかけてのテラス状遺構を検出した陰田荒神谷遺跡（本書本文編II、第8章）が所在する。また当遺跡の北方約30m、マノカンヤマの北西山麓部に陰田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区（本書本文編II、第5章）が所在し、ここでも7世紀以降のテラス状遺構が検出されている。遺跡眼前の水田部には陰田小犬田遺跡（本書本文編II、第7章）が確認されており、周辺遺跡からの流入と思われる遺物の包含層が形成されている。

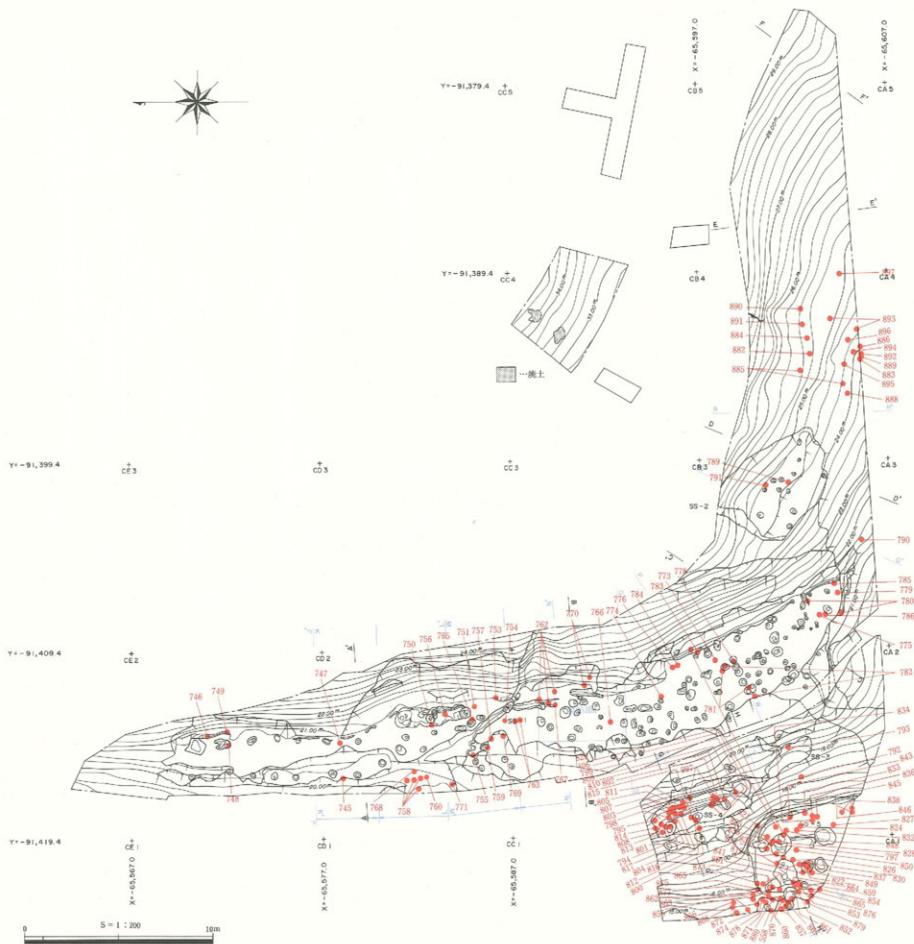
第2節 調査の経過と方法 (第226、244図)

調査は、平成5年4月より準備作業に着手、以後11月まで現場作業を実施した。調査地内は、事前に米子市教育委員会によって試掘調査が行われており、遺構、遺物の検出状況と現地形の様子から判断して、調査範囲を決定した。調査面積は604m²であった。調査前の地形を測量後、現地形を勘案してペルトを設定し、土層状況を観察しながら手掘りにより表土を除去した。当調査地においては、現況で5ヶ所の段状の地形が確認でき、テラス状の遺構を意識しながらの調査となった。掘り下げは、排土処理の関係から、SS-1の北方端及びSS-2の東方端から着手、以後SS-5に向かって進めた。SS-2の北東斜面部には、横穴墓を思わせる凹状の微地形が観察されたため、小調査区4ヶ所を設定し、掘り下げた。結果的には、CC4杭付近の調査区で2ヶ所の焼土面を確認したにとどまり、遺構の検出に至らなかった。必要に応じて、遺物の出土状況の写真撮影、実測、取り上げを行った。実測は、10m画グリッドをなす測量用基準杭を南北軸にあわせて設定し、これを利用した。遺構の検出にあたっては、調査地全体で石英斑岩の岩脈が卓越しており、岩盤とそれに連なる面をベースとした。検出された遺構については、それぞれ写真撮影、実測を行い、調査区全体については、調査後の地形を平板測量し、ラジコン・ヘリコプターによる全体空中写真撮影を行った。11月に現地説明会を実施し、多数の参加を得た。

第3節 遺構と遺物

1 概要 (第244、245図)

遺構は、テラス状遺構を調査地の西側斜面で5基（SS-1～5）、土坑を1基（SK-1）検出した。SS-1、2、4、5は、掘立柱建物を伴うもので、SS-3は、ピットを伴わない小規模なものである。SS-1は、4棟の建物跡を伴うと判断したが、南北に細長く伸びる大型のテラス状遺構である。SS-5は、大半が調査区外にあり、検出した範囲でもその本来の規模が窺われるほどであった。建物は石英斑岩の岩盤にピットを穿つもので、岩脈の節理方向に沿わない掘り込みであった。SS-2の東側においては遺構を確認していないが、調査区外南側に現況で平坦な地形が確認でき、テラス状遺構の北側端部付近にあたるものと思われる。ここ



第244図 陰田ヒチリザコ遺跡全体遺構実測図

で遺物の出土がみられたので、SS-2 東方出土遺物（第272、273図）としてまとめ、調査区外に存在する遺構との関連を推察した。また、SS-5 の西側下方の狭い範囲からまとめて遺物の出土がみられ、SS-5 下方出土遺物（第267、268図）としてまとめ、上方からの転落遺物として把握した。遺構の時期は、テラス状遺構が7～8世紀で、土坑は不明である。

2 テラス状遺構（SS-1～5）

・SS-1（第245、246、248～253、260～263図・写真図版50～53、85）

調査地の西側斜面に位置する。調査前の段階で細長い段状地形が確認できた。検出面で、標高20～21m、水田面からの比高14.5～15.5mの間に位置する。

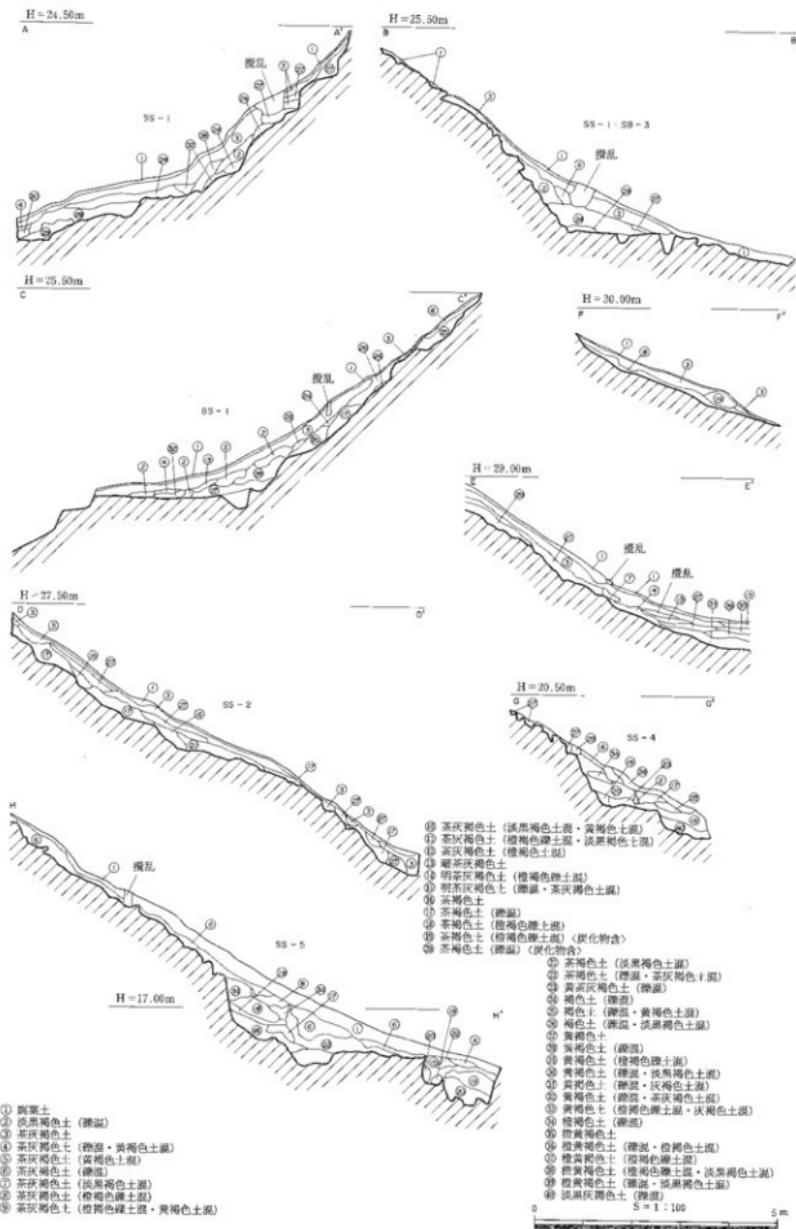
表土下の3層茶灰褐色土を除去すると、有機分を含んだ2層の淡黒褐色土が断続的に広がっていた（第245図・写真図版52）。旧表土と判断され、テラス状遺構廃絶後の形成と推察した。その下層の24層褐色土上面で遺構検出を試みたが、結局この層を流入土と判断した。24層の下層で、A-A'ラインの土層断面で観察できる28層の黄褐色土は、平坦面の下方に堆積しており、その上面が岩盤の地盤の高さにほぼそろってくるため、テラス状遺構の床面を造成したものである可能性がある。ただし、若干の調整のための盛り土は考えられるものの、岩盤上に貼り床を施した形跡は、認められなかった。

遺構は、傾斜面を断面L字型に掘削し、平坦面を設ける構造である。後背崖面の掘部に溝を設けているが、断続的である。建物に対応する位置に設けているようである。掘立柱建物を伴っており、ピットの並びからSB-1～4の4棟を判断した。平坦面の後背崖面裾部のラインがテラスを区分するように、3ヶ所で鍵形の折れ線を描き、北から南に向かって奥まっていく。4棟の掘立柱建物は、この4つのエリアに応じて建てられているようである。平坦面の規模は、南北の遺存長約36m、東西の遺存幅はそれぞれのエリアで異なる。この場合の遺存寸法とは、すなわち平坦な岩盤の範囲を示すものである。後背崖面裾部の最大比高差は4mを測る。

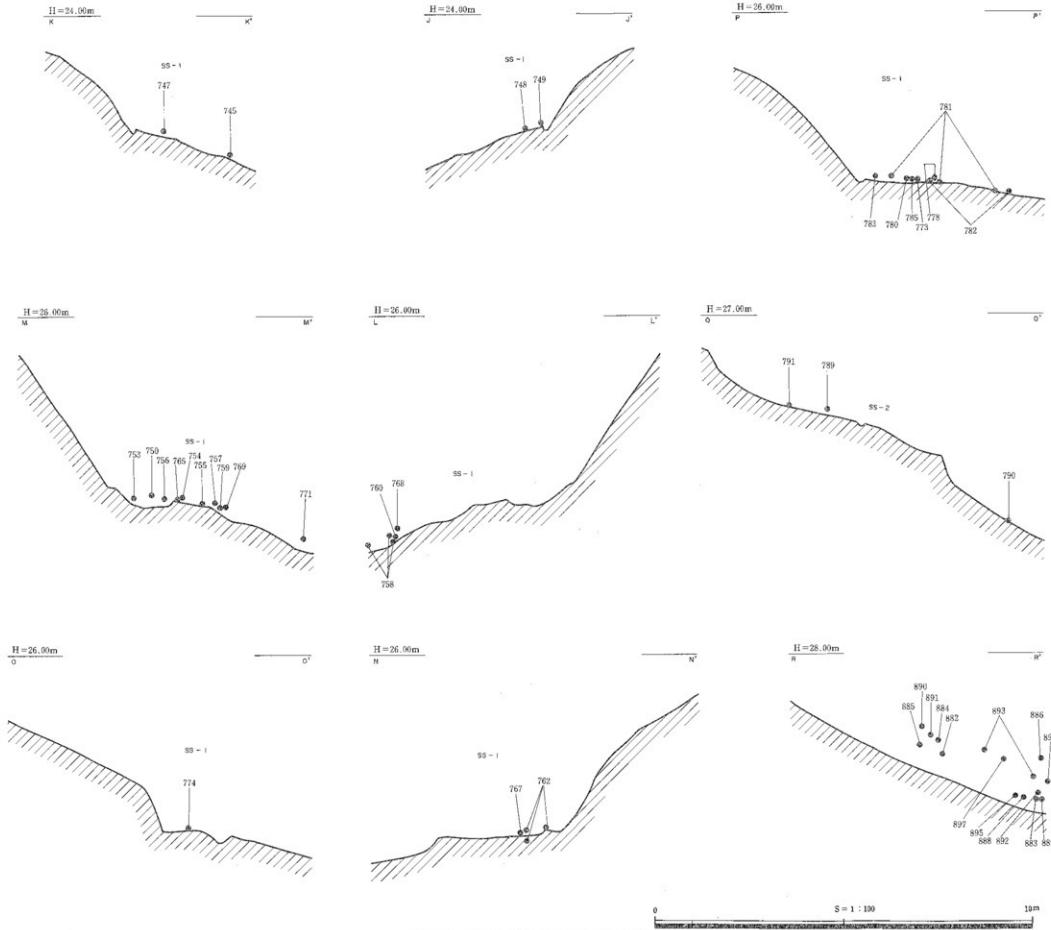
SB-1（第249、260図・写真図版50）は、SS-1の最北部に位置する。桁行6間・梁行1間の建物で、南北長8.6m、東西幅約2mを測る。柱間は、70～160cmで一律ではない。ピットの径は30～40cmであるが、後背崖面側の列にあたるピットには、不整形なものがみられ、反対列のピットとの底面レベルの比高差は30～90cmを測る。前述したが、西側下方に28層で床面を造成している可能性がある。このエリアでの平坦面の南北遺存長は約11m、東西遺存幅は60cm～2mである。後背崖面裾部には、断続的に溝が設けられており、幅約15cm、深さ1～6cmを測る。溝と柱穴列との位置関係が近いため、雨落溝ではなく、後背から流入する雨水を受け、排水するための施設と考える。このエリアで出土した遺物は、第260図に示した。須恵器の壺（745）、甕（746、747）、土師器の甕（748）、支脚片（749）である。全て岩盤上面での出土である。745は底部を欠くがおそらく高台をもつもので、7世紀後葉から8世紀の間に比定されよう。

SB-2（第250、261図・写真図版50）は、SB-1の南側に位置する。桁行2間・梁行1間の建物であると判断した。南北長3.5m、東西幅約1mを測る。柱間は、桁行で1.1m前後、梁行で30cmを測る。ピットの径は30～80cmで、後背崖面側の列にあたるピットは、不整形で大きい。このエリアでの平坦面の南北遺存長は約7m、東西遺存幅は約3mである。後背崖面裾部には、若干溝の痕跡が認められる。このエリアで出土した遺物は、須恵器の蓋（751）、壺（750、753～756、765）、高壺（759）、挽（764）、甕（763）、土師器の丹塗りの皿（769）である。うち755、765が岩盤上面からの出土である。また平坦面の西側下方部から転落と思われる須恵器の高壺（758、760）、土師器の甕（768）、支脚片（771）が出土している。755は底部を欠くがおそらく系切り底であり、765は系切りが観察される。陰田編年（註1）の10期、8世紀後半に比定される。

SB-3（第251、253、261、262図・写真図版50、53、85）は、SB-2とSB-3の中間に位置する。桁行2間・梁行1間の建物であると判断した。南北長約3m、東西幅約1.3mを測る。柱間は、桁行90cm～1.2m、梁行で75cm前後を測る。ピットの径は25～50cmで、後背崖面側の列にあたるピットは大きい。このエリアでの平坦面の南北遺存長は約8m、東西遺存幅は約3mである。後背崖面裾部には溝が設けられており、幅約20～30cm、



第245図 調査地内土層断面実測図



第246図 調査地内遺物出土状況断面実測図(1)

H = 21.00m
S

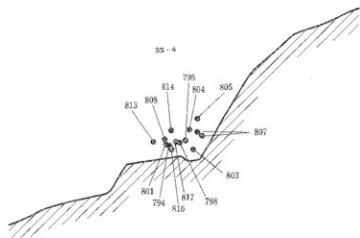
— S —

H = 21.00m
T

— T —

H = 21.60m
W

— W —



H = 20.00m
U

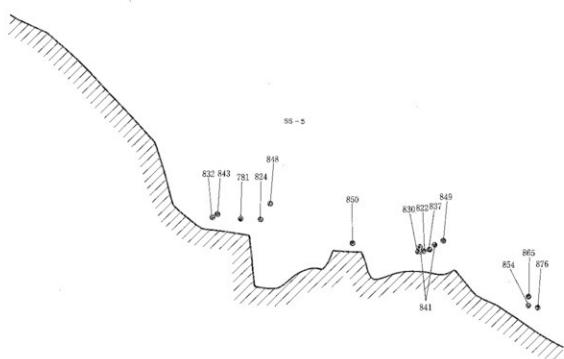
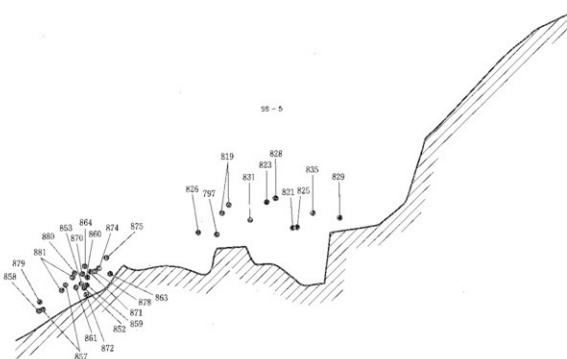
— U —

H = 20.00m
V

— V —

H = 20.00m
W

— W —

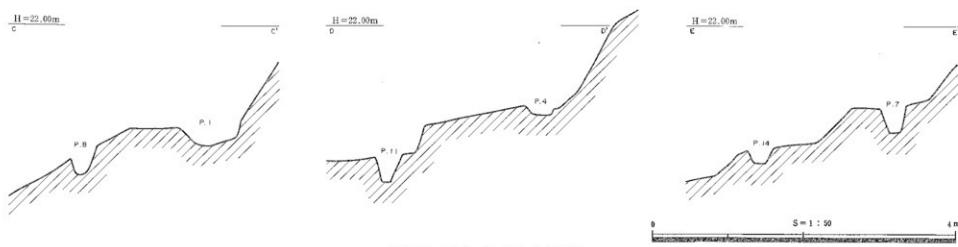
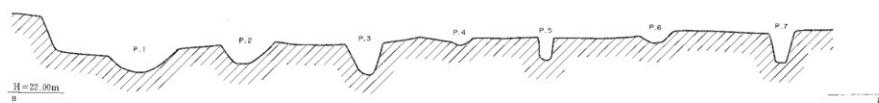
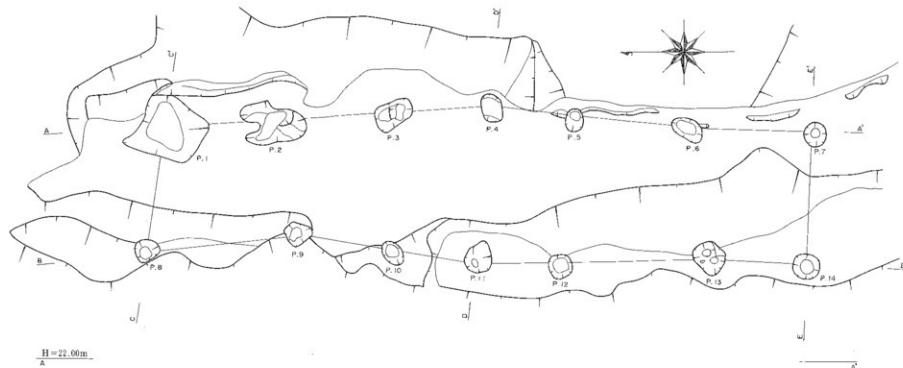


S = 1 : 100
10m
— 10m —

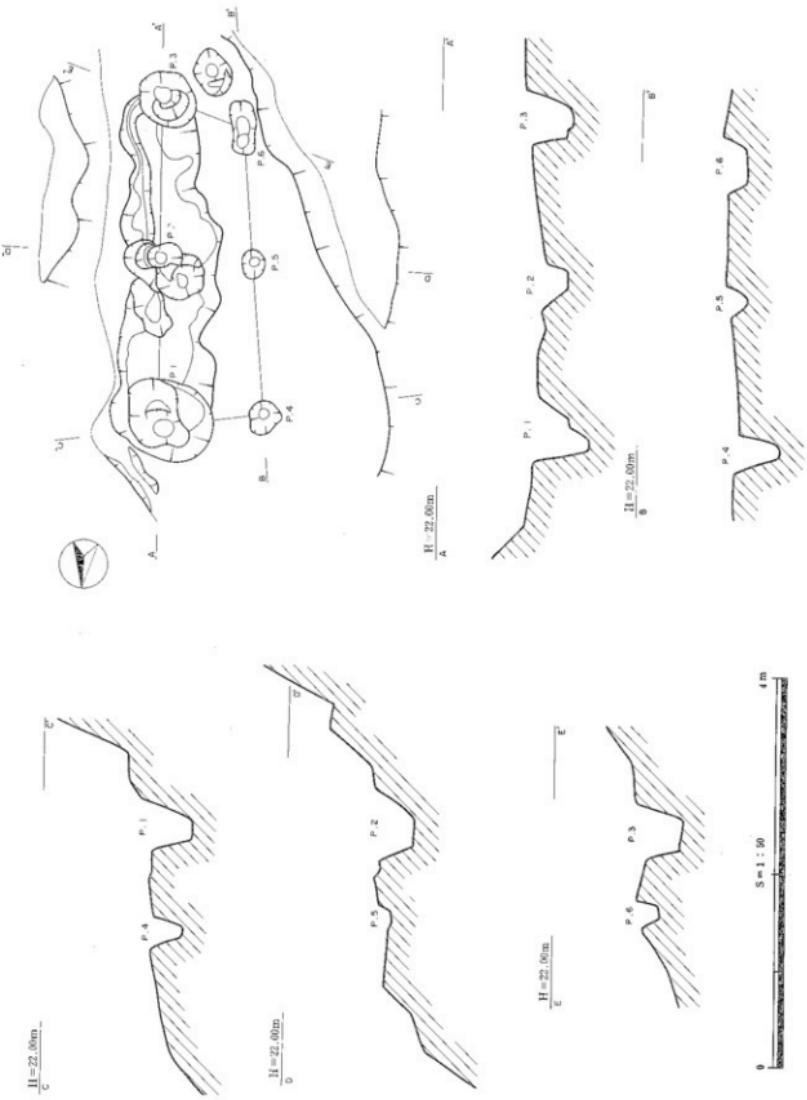
第247図 調査地内遺物出土状況断面実測図(2)



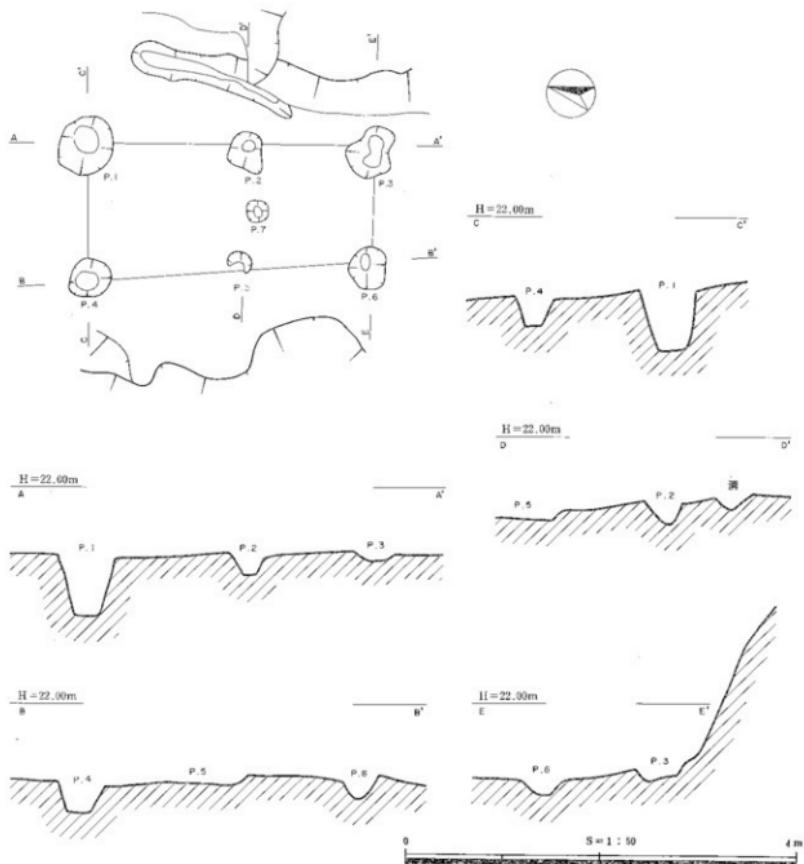
第248図 SS-1、2 実測図



第249図 SS-1・SB-1 実測図



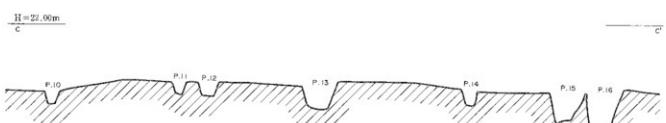
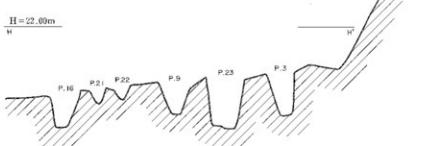
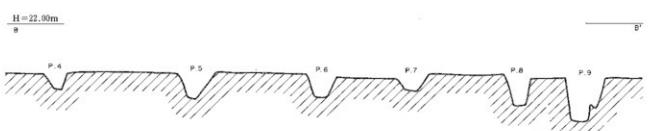
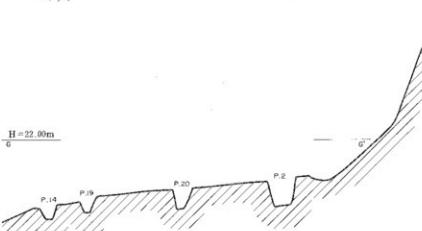
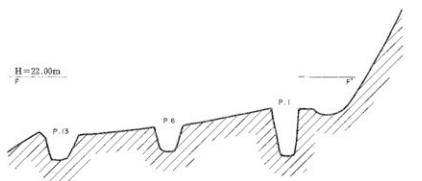
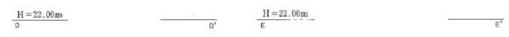
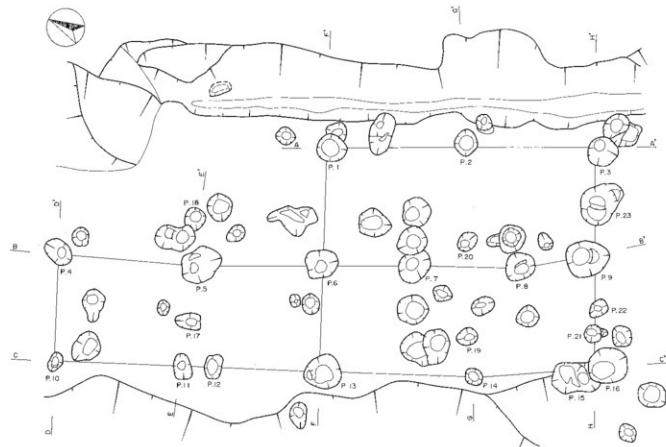
第250圖 SS-1・SB-2 實測圖



第251図 S S - 1・S B - 3 実測図

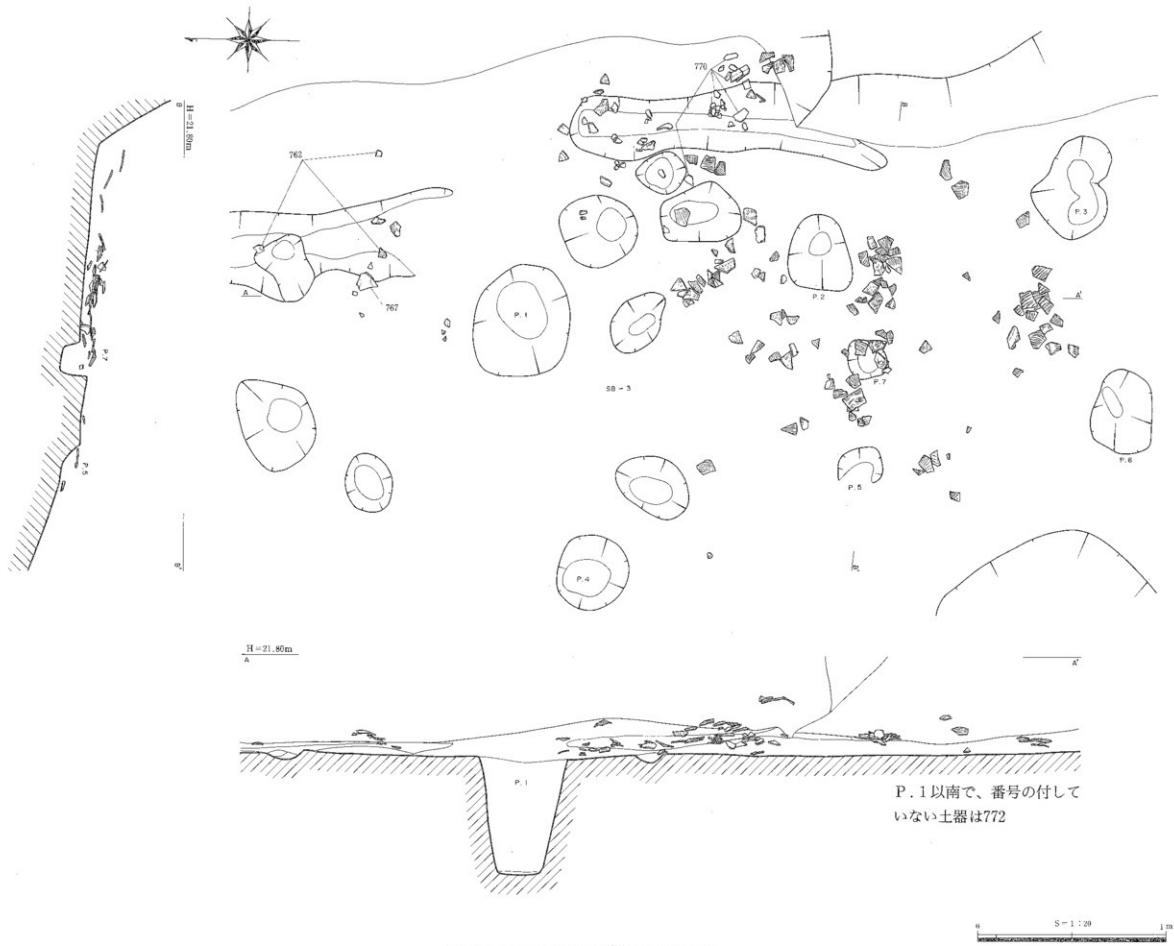
深さ約5cmを測る。このエリアで出土した遺物は、須恵器の壺(757)、壺(761、762、766)、甕(767、772)、土師器の甕(770)である。767、772が岩盤上面での出土である。772は大型の甕であるが、S B - 3付近に破片が集中していた(第253図・図版53)。この場で叩き壊された印象を受けた。767は、内面に放射状のタタキを施す甕である。胎土分析の結果、陶邑産の可能性が指摘された(註2)。757、762は底部に糸切りが観察され、8世紀後半に比定されるが、このエリアの造成時期を直接示すものではない。

S B - 4(第252、263図・写真図版50、85)は、S S - 1の最南部に位置する。桁行2間・梁行2間で心柱に2本の柱を用い、これに桁行2間・梁行1間分北側に伸びる形態の建物を推定した。南北長約7m、東西幅約3mを測る。柱間は、桁行1.5m前後、梁行1m前後を測る。ピットの径は15~50cmである。このエリアでの平坦面の南北遺存長は約10m、東西遺存幅は約4mである。後背崖面裾部には溝が設けられており、深さ約5cmを測る。上方から流入する雨水を排水する施設と思われる。このエリアで出土した遺物は、須恵器の壺

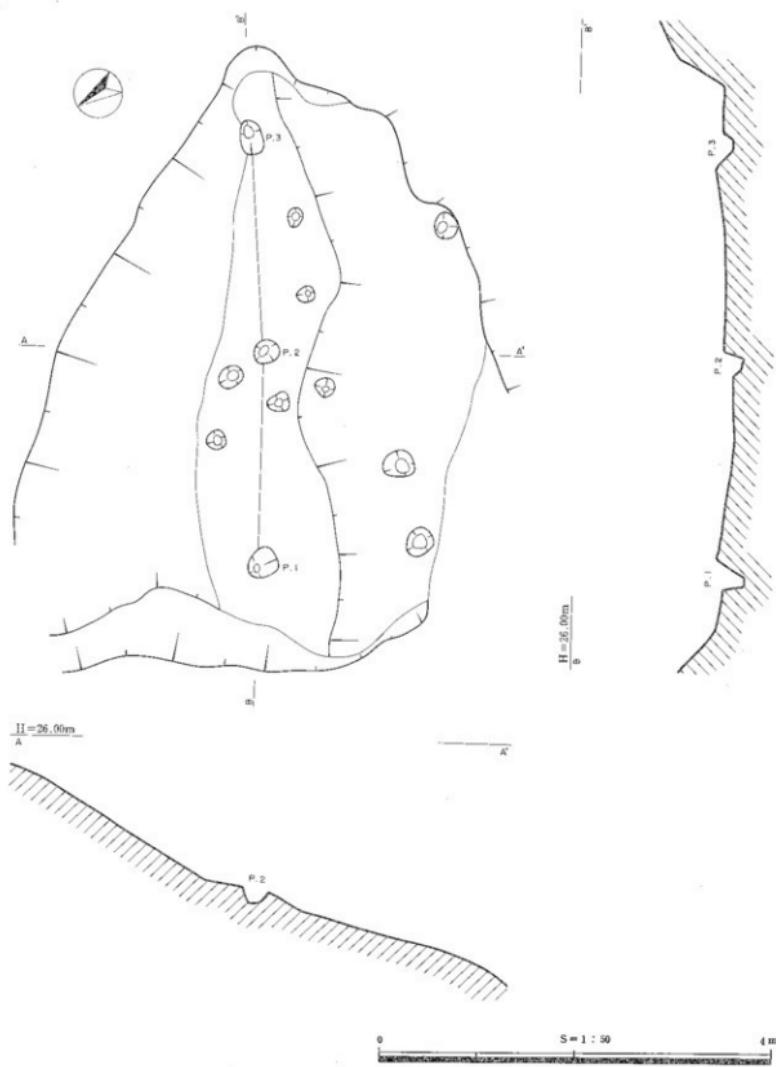


S = 1 : 56 4 m

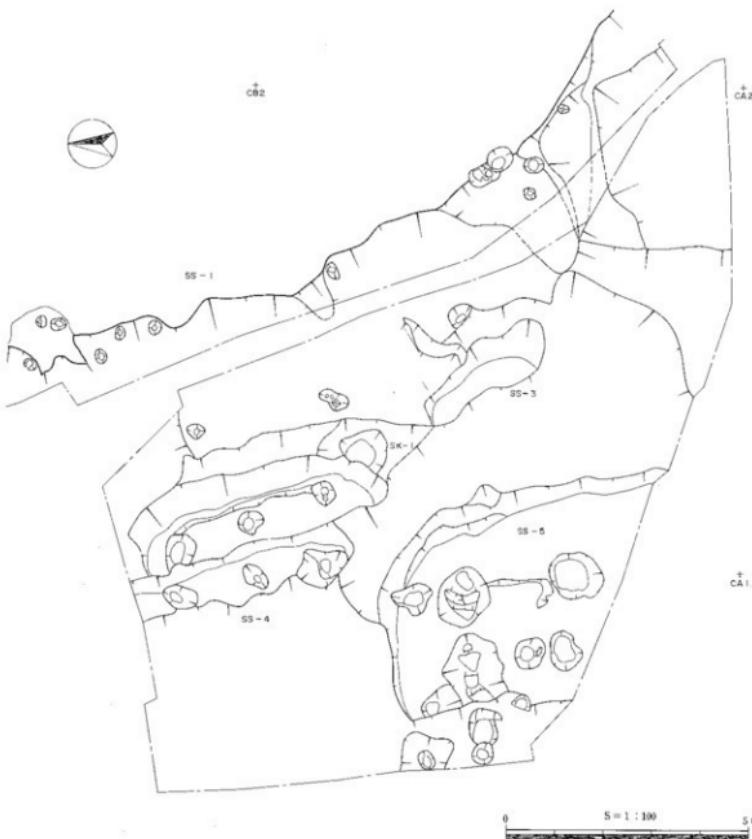
第252図 SS-1・SB-4 実測図



第253図 SS-1、SB-3 遺物出土状況実測図



第254図 SS-2 実測図



第255図 SS-3、4、5実測図

(773~779、783)、壺(781、782、784)、甕(780)、土師器の甕(787)、皿(785、786)、支脚の基部(788)である。このうち774、781、782が岩盤上面での出土である。773、778、780、783、785もほぼ上面といえるレベルからの出土である。783の底部には糸切りが観察され、774、778も糸切り技法の底部となると思われる。8世紀後半に比定される。

各エリアからの出土遺物はほぼ同時期を示し、SS-1の掘立柱建物群は並存していた可能性がある。ただし後で触れるが、SS-4、5から、上方からの流れ込みと思われる遺物(第266図795、第267図819など)が出土している。これらの土器の時期は、概ね陰田編年の7~8式の段階を示し、7世紀後半の時期にあてられる。よって、SS-1の原形となるテラスはこの期に築かれ、のちに断続的な使用に供され、後背崖面の掘削や床面の造成などにより、その都度抜築されていったものと推察される。そして、テラスの廃絶は、8世紀後半以後ということになる。なお、各建物の平面プランが整然としていないのは、雑舎的建物であった故か、岩盤のために柱

穴の穿孔が困難であったためか、判断できなかつた。

- ・SS-2 (第254、264図・写真図版51)

SS-1の南東側に位置する。調査前の段階で段状地形が確認できた。検出面で、標高24~25m、水田面からの比高18.5~19.5mの間に位置する。表土下の3層茶灰褐色土を除去すると、上方からの流入土である茶褐色土が堆積していた。その下部は岩盤である。下方に盛り土をして平坦面を増床した様子は、観察されなかった。

遺構は、傾斜面を断面L字状に掘削し、平坦面を設ける構造である。後背崖面の裾部に溝を確認できなかつた。P1~3による建物を伴うものと考えられる。ピットの径は25~40cmで、柱間は1.9mを測る。平坦面の規模は、遺存長約6m、遺存幅は50~120cmで、後背崖面掘削の最大比高差は1.2mを測る。

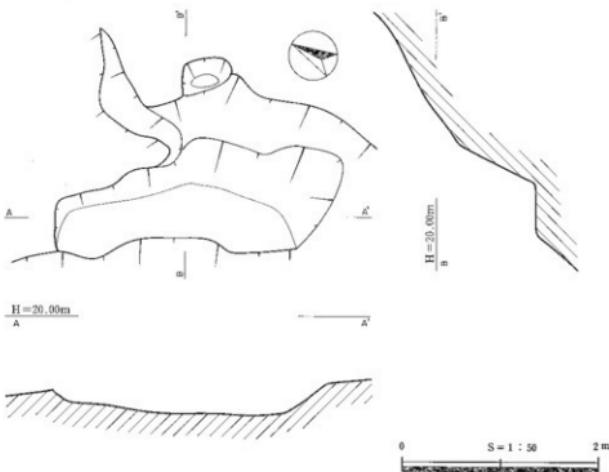
遺物は、須恵器の短頸壺(789)、壺(790)、甕(791)が出土した。791は岩盤上面、789もほぼ上面での出土といえよう。790はテラスより下方に転落した位置で出土している。789は、自然釉のかかり方から、蓋を伴うものと考えられる。

- ・SS-3 (第255、256、265図・写真図版51)

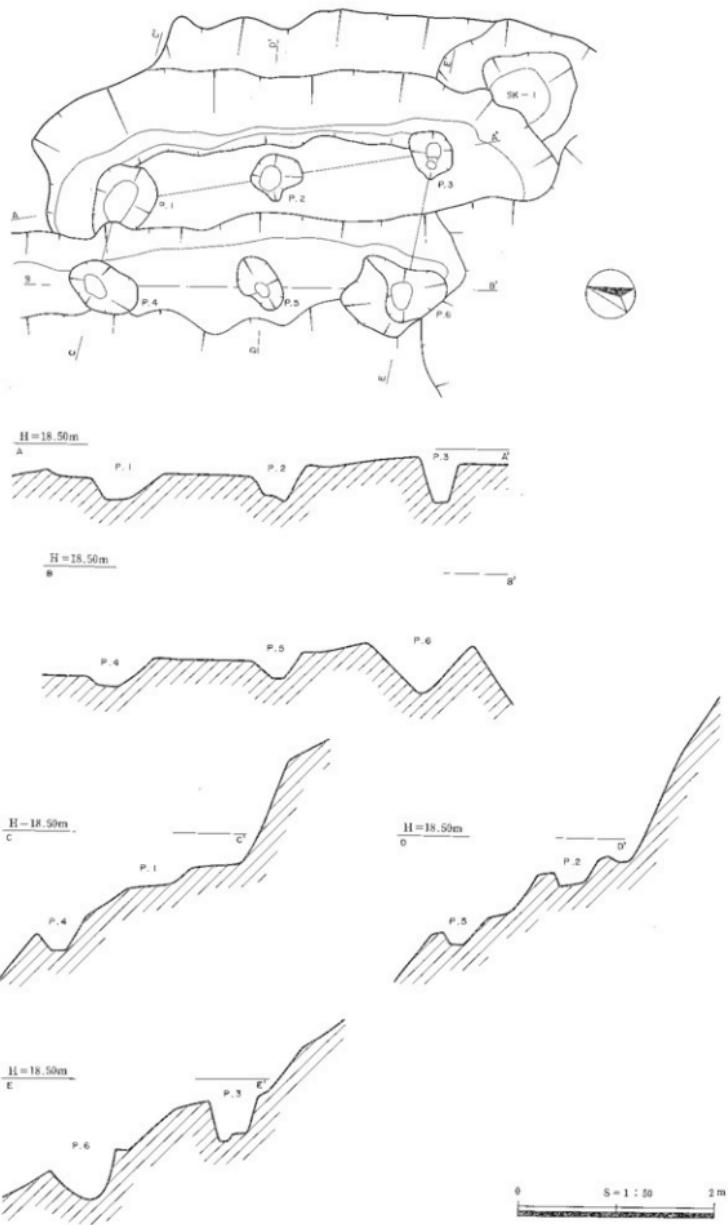
SS-1の南西側下方、SS-5の上方に位置する。検出面で、標高19m、水田面からの比高13.5mに位置する。表土下の3層茶灰褐色土を除去すると、上方からの流入土である6層茶灰褐色土が堆積していた。これを除去すると、小型のテラスを検出した。下方に盛り土をして平坦面を増床した様子は、観察されなかつた。遺構は、傾斜面を断面L字状に掘削し、平坦面を設ける構造である。後背崖面の裾部に溝を確認できず、また、ピットも検出されなかつた。平坦面の規模は、遺存長2.45m、遺存幅は50cm前後で、後背崖面掘削の最大比高差は75cmを測る。出土遺物は、須恵器の高坪の脚部(793)である。床上面からの出土である。転落である須恵器の坪蓋(792)も掲載した。

- ・SS-4 (第255、257、266図・写真図版51、85)

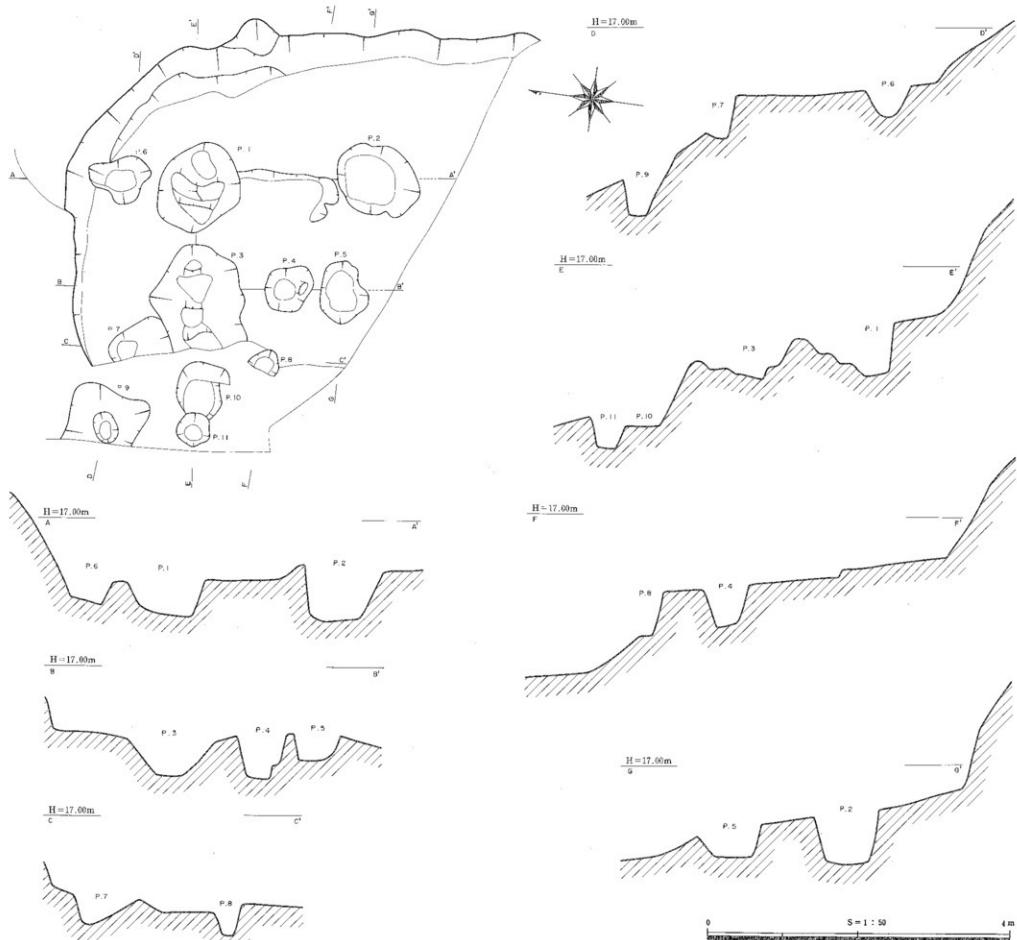
SS-1の南西部、SS-3の北側に位置する。検出面で、標高18m、水田面からの比高12.5mに位置する。上方からの流入土である茶褐色系の土を除去すると、小型のテラスを検出した。下方に堆積した40層の淡黒灰褐色土は、増床のための盛り土の可能性があるが、この層の上面でピットを確認できなかつた。遺構は、傾斜面を断面L字状に掘削し、平坦面を2段設ける構造である。それぞれの段にピット列が並び、掘立柱建物を構成している。後背崖面の裾部には、溝を設けている。平坦面の規模は、南北の遺存長約4.3m、上段の遺存幅は70cm、下段の遺存幅は90cmである。後背崖面掘削の最大比高差は上段で1.5mを測る。上段と下段との比高差は、約50cmである。掘立柱建物は、いびつながらも桁行2間・梁行1間の建物で、南北長3.2m、東西幅約1.1mを測る。柱間は、概ね1m前後だが、北側の梁行が極端に狭くなる。ピットは長方形形気味である。遺物は全て上方から



第256図 SS-3 実測図



第257図 S S - 4 実測図

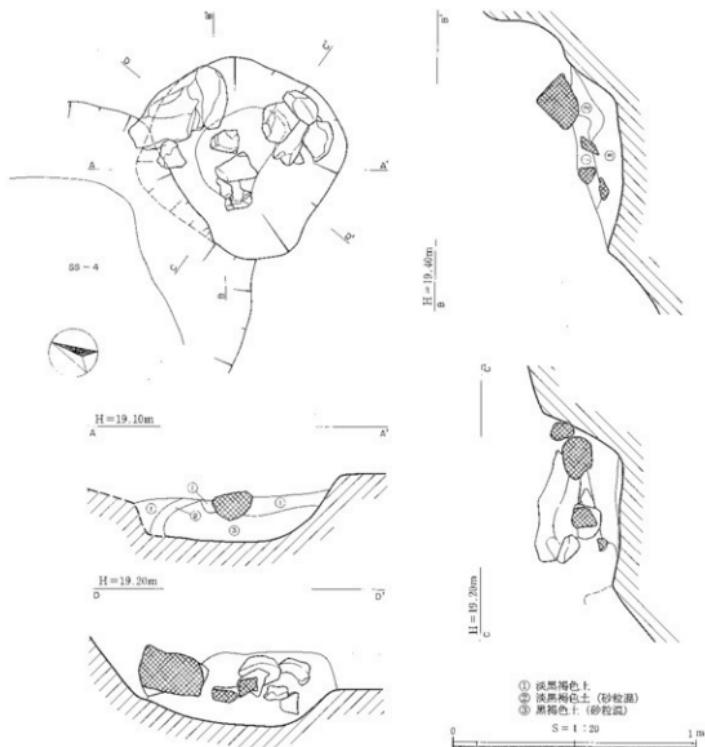


第258図 SS-5 察測図

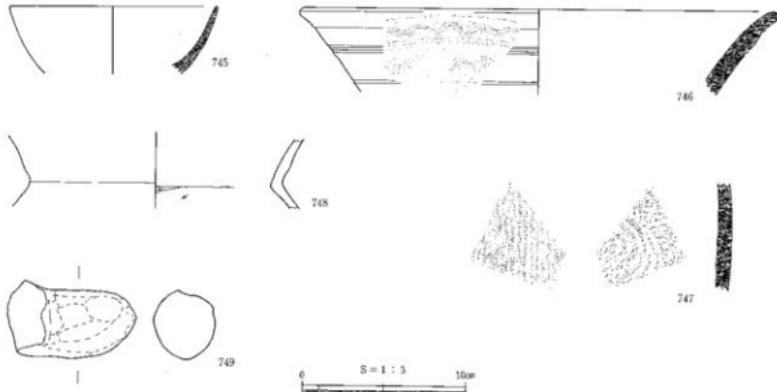
の転落遺物で、このテラスの時期を示すものはない。須恵器の蓋（794～799）、环（800、801）、高环（802、803）、脚台（804）、土師器の甕（805～813）、丹塗りの皿（814、815）支脚（816、817）が出土している。794は陰田編年の6式、7世紀前葉、795～797、800～803は7式、7世紀中葉、798、799は8式、7世紀後葉に比定されよう。

・SS-5 (第255、258、267~271図・写真図版51、85、86)

S S-3、4の南西側下方に位置する。調査前の段階で、段状地形が調査以外の南方に伸びているのが確認できた。検出面で、標高16~17m、水田面からの比高10.5~11.5mに位置する。造構は、傾斜面を断面L字形に掘削し、平坦面を設ける構造である。後背崖面の裾部には、溝を確認できなかった。平坦面の規模は、南北の最大検出長約5m、東西の遺存幅は4mである。後背崖面掘削の最大比高差は1.2mを測る。P 1~3、5を柱穴とする掘立柱建物を伴うが、さらに南方に伸びるものと思われる。南北検出長2.5m、東西幅約1.5mを測る。柱間は、桁行で1.1~1.2m、梁行で80cmを測る。上方からの流入土である6層の茶灰褐色土を除去すると、22層の茶褐色土が堆積していた。この層の後背崖面側の分層ラインが上方に立ち上がりしており、テラスの造り替えを示唆するものと判断した。この立ち上がりは、P 1~2間に検出した10cm程度の段差に対応するものとみる。テラスの西側縁辺部及び下方にP 7~11のピットを検出したが、建物の建て替えに伴うものと推察される。以下、造り替えの前後のテラスをそれぞれ、旧テラス、新テラスと呼称する。新テラスの後背部の堆積土上に、19層の茶褐色



第259圖 S.K=1 實測圖



第260図 S S - 1 出土遺物実測図(1)

土がみられるが、P 8 の下方にも同じ19層の堆積がみられ、新テラスは西側に増床していた可能性がある。

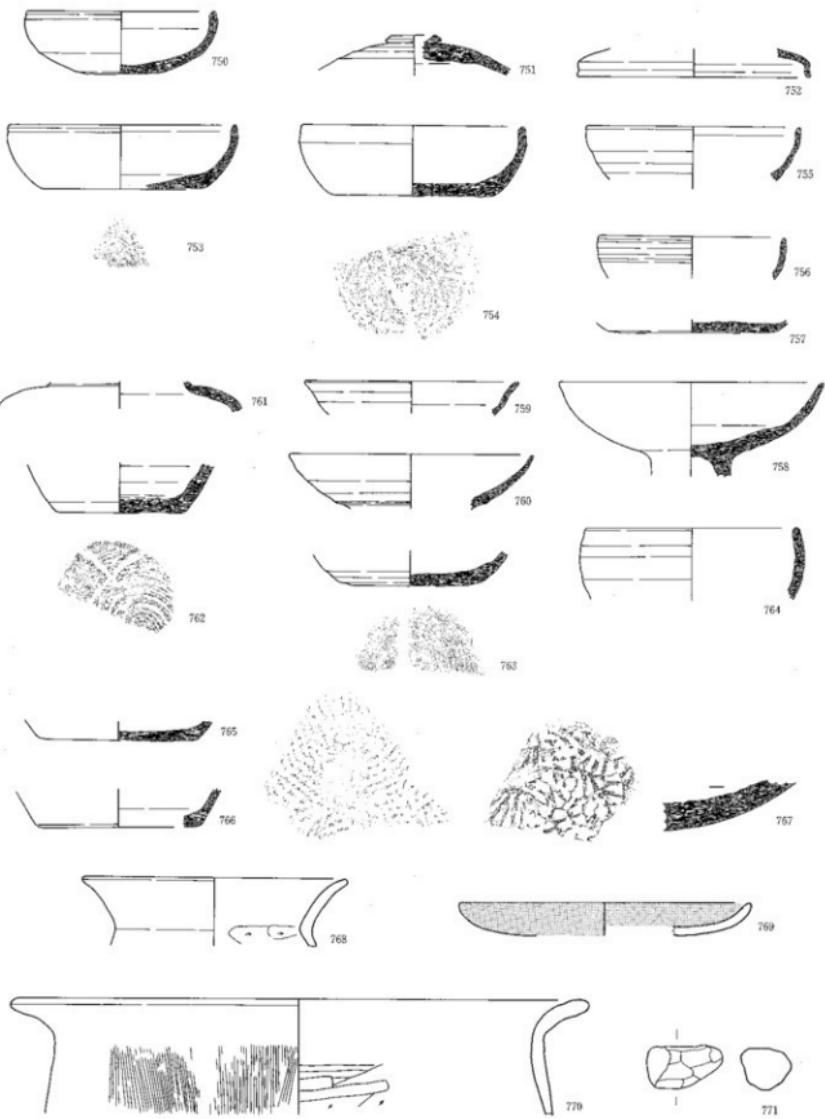
遺物は全て上方からの転落遺物であり、このテラスの時期を示すものはないが、新旧テラスの造り替えによって、転落時期に差異を認めることができる。新テラス造成前の転落遺物としては、新テラスの後背部の堆積土中から須恵器の蓋（829）、高坏（832～834）、甕（843）、土師器の甕（845）が出土している。また、S S - 5 下方出土遺物としてまとめた一群の遺物のうち、864、875以外のもの全てが新テラス造成前の転落と判断される。須恵器の蓋（852～854、857～860）、坏（855、856）、高坏（861、862）、甕（781、863）、甕（865～867）、土師器の甕（868～874）、丹塗り皿（876、877）、丹塗りの高台（878）、甕（879、880）、支脚（881）が出土している。新テラス廃絶後の転落遺物としては、須恵器の蓋（797、818、819、827、828、830、839）、坏（820～826、831）、高坏（835～838）、甕（840、841）、甕（842、864）、土師器の甕（844）、丹塗り皿（846、875）、土鏡（848）、支脚（847）、鉄滓（849、850）、安山岩製の台石（851）（註3）が出土している。839は、短頸甕等の蓋と考えるが、天井部中央に「吉」とへら書きされている。

両遺物群とともに、陰田編年7～8式（7世紀中葉～後葉）に属する須恵器を含んでおり、土器相による新旧両テラスの時期決定を為し得なかったが、新テラスは少なくとも陰田編年8式以降であることは判断できよう。また、後背部堆積土中出土の781は、S S - 1 のS B - 4 のエリアの時期（8世紀後半）を示す個体と接合するものであり、よって新テラスはS S - 1 のS B - 4 のエリアより新しく、8世紀後半以降に造成されたことが判断される。新テラス廃絶後の転落である797は、S S - 4 出土の個体と接合するものであり、S S - 4 での出土状況を勘案するに、新テラスはS S - 4 と並存した可能性が高い。

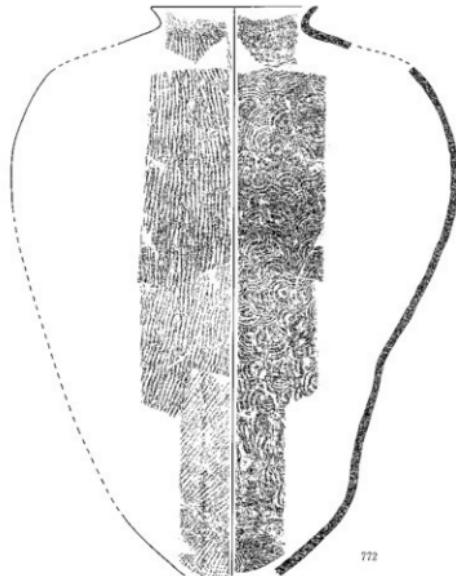
S S - 5 からは、1,120g にのぼる鉄滓の出土をみた。すべて上方からの転落である。うち2点（写真図版95・資料NO.4、5）を金属学的に分析したところ、精錬鍛冶滓と、大鋳冶の際に鉄滓と分離しなかった銅片であることが推定された（註4・本書本文編II、第9章第3節）。固化した849、850は椀形鍛冶滓である（註5）。当遺跡においては、焼土塊や多量の炭など鍛冶を便びせる状況は、確認されなかった。

• S S - 2 東方出土遺物（第244、246、272、273図・写真図版86）

S S - 2 の東方において、遺物の集中的な出土をみた。前述したとおり、南側に平坦地が広がっており、テラス状遺構の北側端部にあたる場所とみる。検出面で、標高24～26m、水田面からの比高18.5～20.5mに位置する。遺物は出土レベルにより、上下2群に分けられる。上群は、須恵器の蓋（882）、坏（884～886、890）、甕



第261図 SS-1 出土遺物実測図(2)



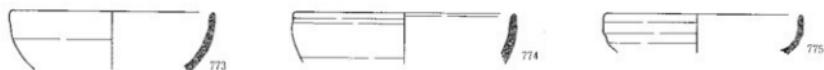
0 S = 1 : 6 20cm

第262図 SS-1出土遺物実測図(3)

(893、894)、土師器の丹塗り皿 (887)、布目の平瓦 (896)、熱を受け、擦痕の観察される礪 (897・細粒閃綠岩) (註6) であり、下群は、須恵器の壺 (883、889)、壺 (888)、壺 (892、895) である。上下群ともに糸切り未調整の壺の底部を含んでいる。

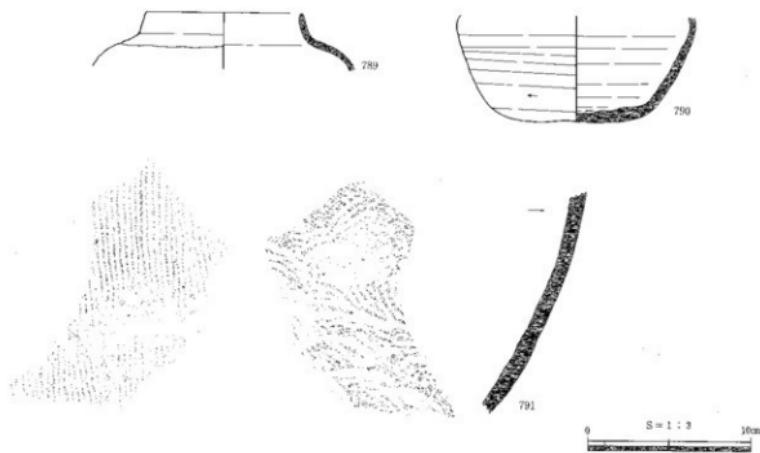
3 土坑 (SK-1) (第259図・写真図版53)

SK-4 の南東隅を切っている。標高は18.5mを測る。平面は隅丸方形を呈し、検出面で80×75cm、深さ40cmを測る。埋土中に躰を含む。遺物は出土していない。

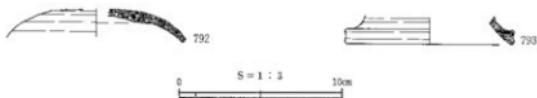


0 S = 1 : 3 10cm

第263図 SS-1 出土遺物実測図(4)



第264図 SS-2 出土遺物実測図



第265図 SS-3 出土遺物実測図

4 遺構に伴わない遺物 (第274~276図・写真版図86)

898は黒曜石製のスクレイパーである。900は磁器の鏡子で、図柄はプリントされている。899は駅弁のお茶用ガラス瓶である。コルク栓で塞がれていた。輪状の持ち手を支えたと思われるくぼみが2ヶ所にある。「鉄道局」は、旧鉄道省の地方機関であり、昭和24年に廃止されている。「大日本麦酒株式会社」は明治39年創業で、昭和24年に現在のサッポロビール株式会社とアサヒビール株式会社に分割された（註7）。

註1 萩本勝・佐古和枝 「第4節：須恵器について」 「陰田」 米子市教育委員会 1984年

註2 三辻利一 「陰田遺跡群出土須恵器の蛍光X線分析」 (本書第9章第1節)

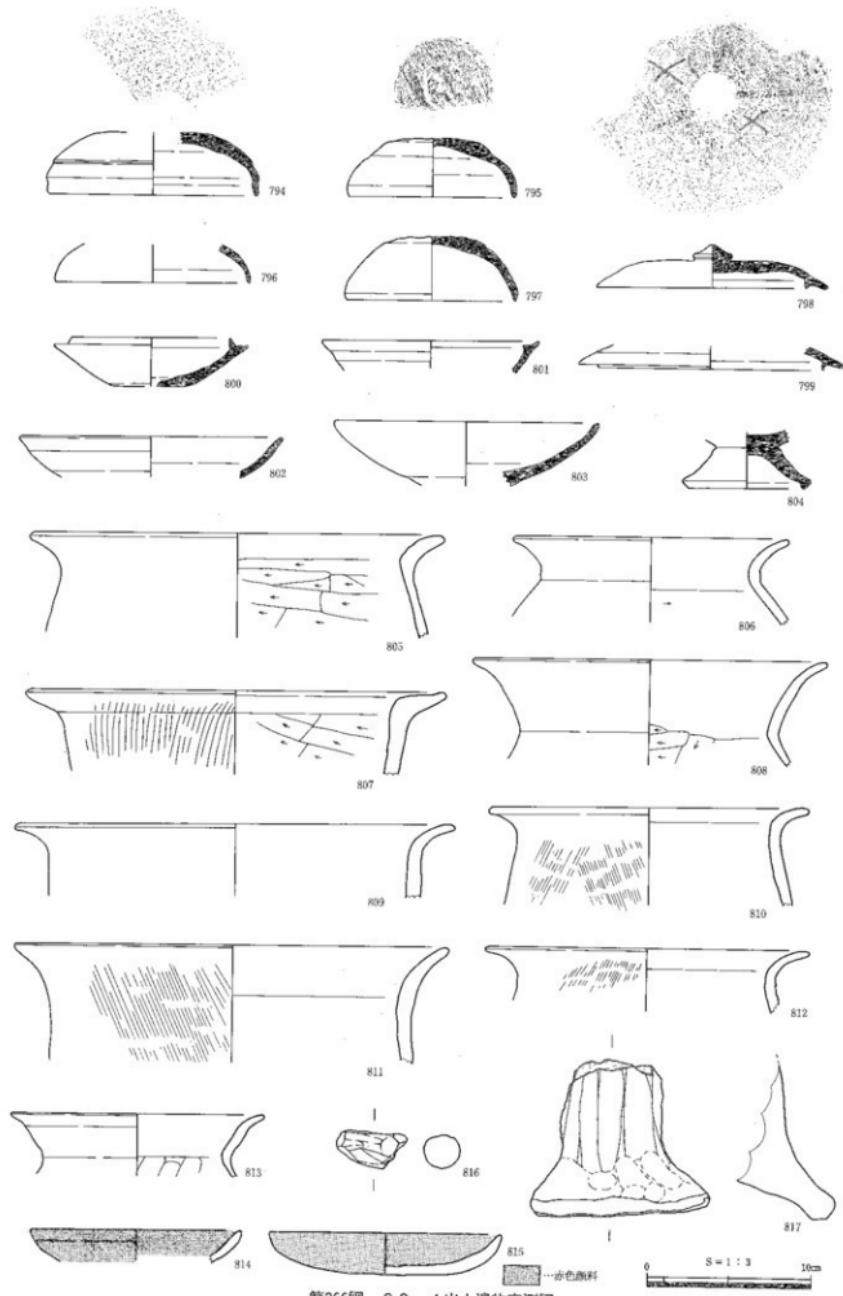
註3 この石製品の石材については、鳥取大学医学部井上貴央先生にご教示いただいた。

註4 和鋼博物館 「陰田遺跡群出土鉄滓の金属学的研究」 (本書第9章第4節)

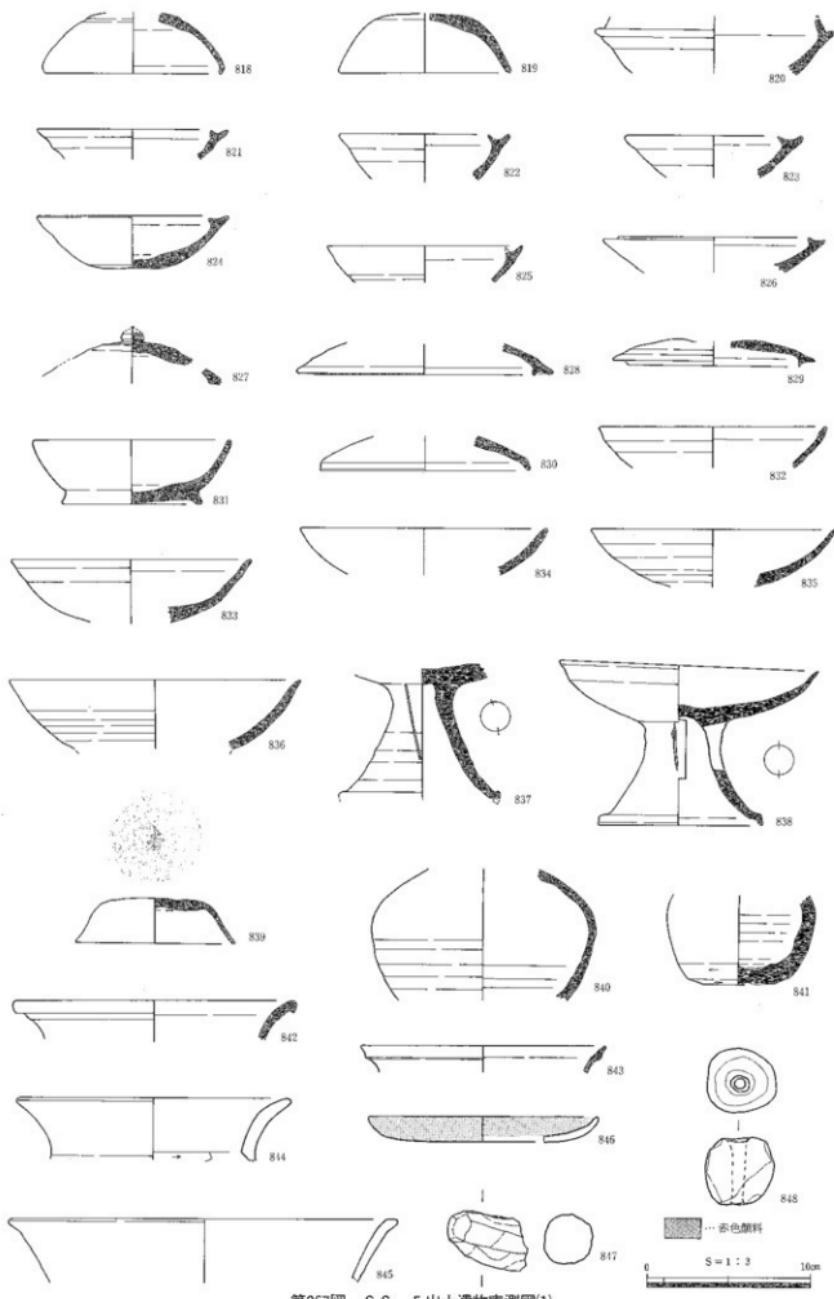
註5 房總風土記の丘穴澤義功先生にご教示いただいた。

註6 この石材については、鳥取大学教育学部赤木三郎先生にご教示いただいた。

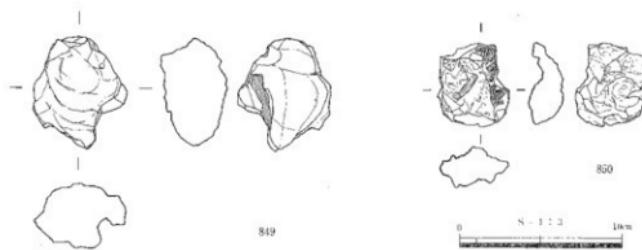
註7 製造会社については、足立統一郎氏にご教示いただいた。



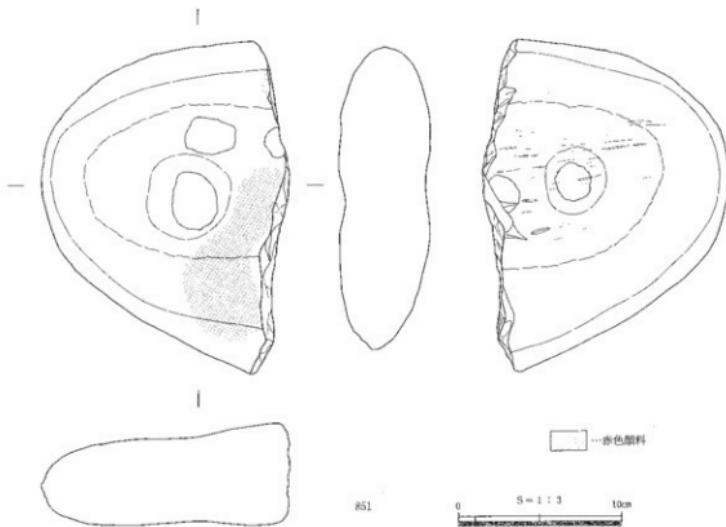
第266図 S S - 4 出土遺物実測図



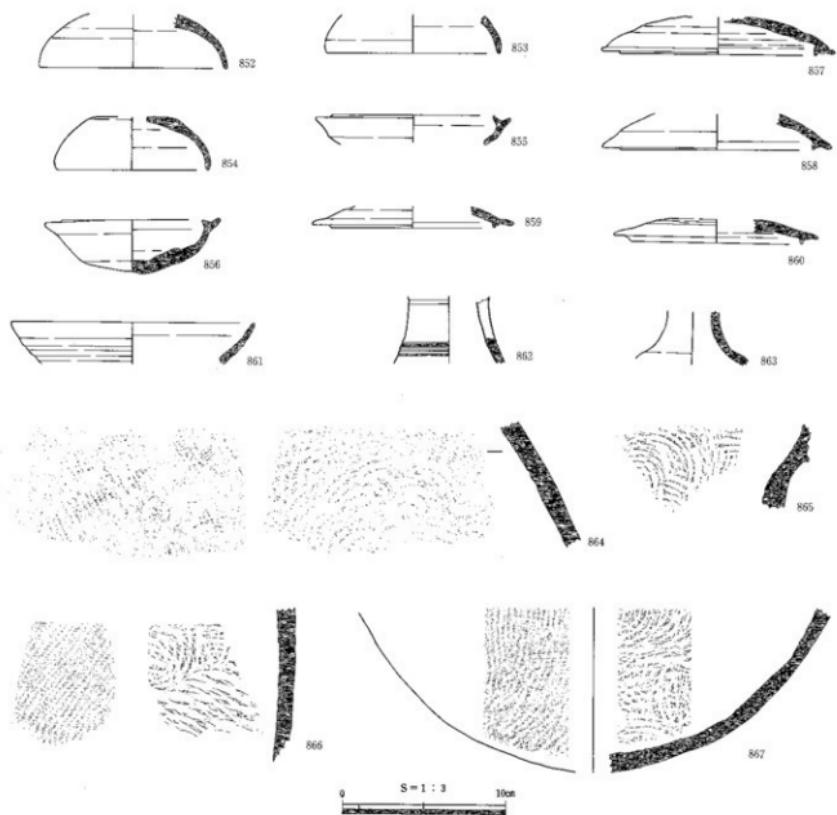
第267図 SS-5 出土遺物実測図(1)



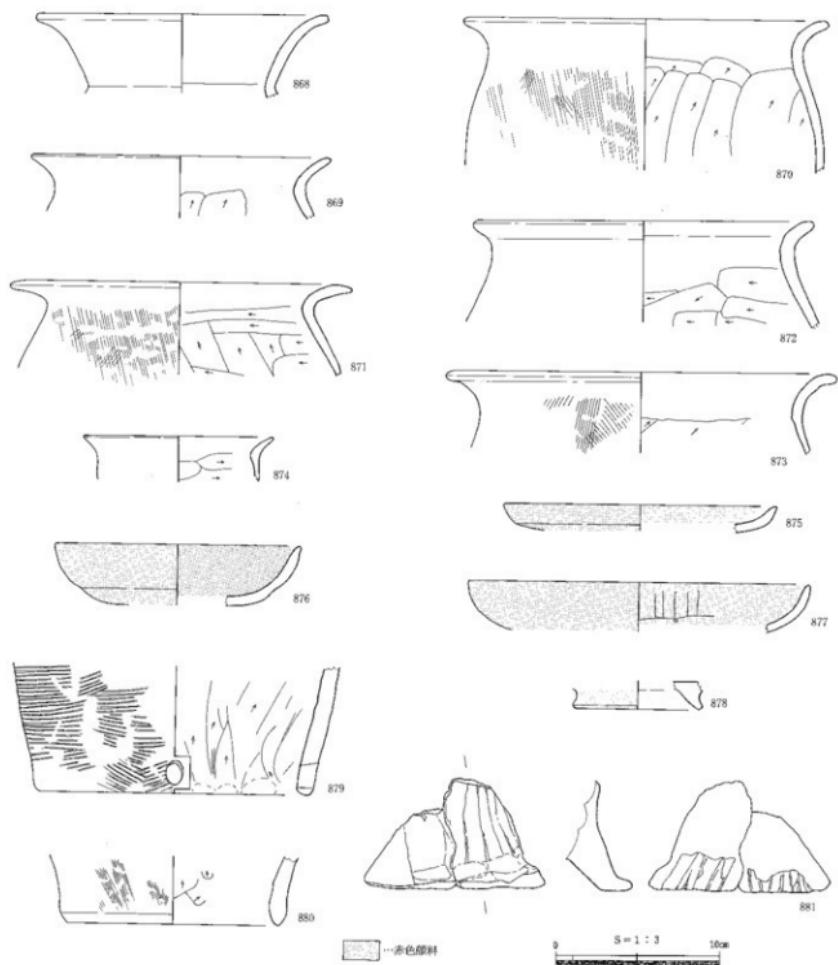
第268図 SS-5 出土遺物実測図(2)



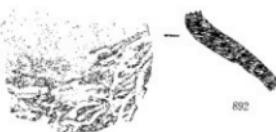
第269図 SS-5 出土遺物実測図(3)



第270圖 SS-5下方出土遺物實測圖(1)

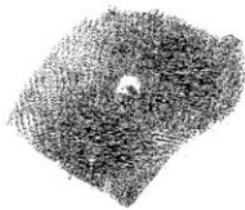


第271図 SS-5 下方出土遺物実測図(2)

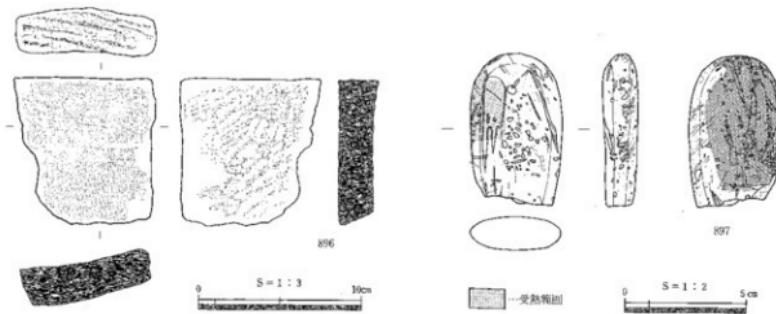


0 S = 1 : 3 10cm

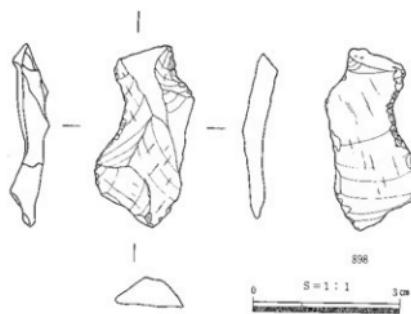
—赤色顔料



第272図 SS-2 東方出土遺物実測図(1)



第273図 S S - 2 東方出土遺物実測図(2)



第274図 遺構外出土遺物実測図(1)



第275図 遺構外出土遺物実測図(2)



第276図 遺構外出土遺物実測図(3)

第7章 隕田小犬田遺跡の調査

第1節 位置と環境（第277図・写真図版54）

隕田小犬田遺跡は米子市隕田町字小犬田堤ノ下に所在する。中海から約700m内陸部に位置し、その東西を低位山麓に挟まれた谷部の遺跡である。

遺跡地の西側に位置する丘陵（荒神谷山・標高約83m）尾根部は、島根県との県境にあたり、尾根東側の山麓には、隕田荒神谷遺跡が存在する。遺跡地東側に位置する丘陵（マノカンヤマ・標高72.8m）の西側斜面には隕田マノカンヤマ遺跡堤ノ下地区が、また、同じ丘陵の南に形成されている谷部斜面には隕田ヒチリザコ遺跡が、ともに本遺跡を見下ろすように存在している。のことから、隕田小犬田遺跡は両遺跡からの転落遺物の出土が十分に予想される地域であった。この地は從来から遺物散布地であることが知られており、事前に行われた米子市教育委員会による試掘調査では、多くの須恵器や土師器が出土し、遺跡の存在が確認された。また、遺跡の南側には小犬田池が位置しており、池の水は遺跡の東端を南北に流れる用水路を通じて、灌漑用水として周辺の農地に供給されている。

隕田小犬田遺跡は、推定で南北に約500m、東西に約50~70mの広がりを持ち、現況で標高約2~12mを測る低湿地遺跡である。特に小犬田池の堤の直下と、遺跡の北端との標高差は約3mで、南から北にかけて緩やかに下っており、一帯では広く水田耕作が行われている。本遺跡は低湿地であることから、古くから水田耕作に利用されていた可能性が強く、水田跡の存在が予想された。

第2節 調査の経過と方法

1 自然科学的手法による調査（第278、279図・写真図版54）

隕田小犬田遺跡は低湿地であるため、プラント・オパール分析および植物珪酸体分析を行い、水田遺構を把握することに努めた。サンプリングは、調査地中央に南北に設置された排水溝の東側壁面から行った。サンプリング地点は、第278図に示されるA~Cの3地点である。サンプルの土壤は古環境研究所において分析した。

分析の結果、第279図中のA地点5、6、7、8層、B地点6、7層、C地点5、7、8層の各層準からはイネのプラント・オパールが高い密度で検出されており、これらの層において稲作が行われていたと推測される。同図中のA地点9層、B地点8層、C地点9層以下では、イネのプラント・オパールは検出されないか、検出されても検出密度が低く、稲作の行われた痕跡は認められなかった。本遺跡では、A地点8層、B地点7層、C地点8層において稲作が始まって以来、連続して水田耕作が行われてきたということが推測される。本調査では最下層の水田の検出に主眼をおいて調査を進めることとした。

それぞれの分析結果の詳細については、以下に掲載する。

